
マジチートって言うジゲン越えてる

ベルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジチートって言うジゲン越えてる

【Nコード】

N5775T

【作者名】

ベルム

【あらすじ】

いつもどおり家に帰って、いつもどおりオンラインゲームやっていつもどおりねたら、そこは知らない空間だった。チート、最強、原作ブレイク、三拍子そろった物語にする予定です。俺Tueeeeee!

やこつち系が嫌いな人は見ないください。これは作者による都合主義がたぶん・・・いや、かなりあると思うんで暖かい目で見守ってください。駄文ですがよろしく願います。

P r a t 1 : 死んで . . . 無いよね . . . ? (前書き)

どうも、はじめまして

あほの作者です

駄文ですが、温かく見守ってくれとうれしいです。

P r a t 1：死んで・・・無いよね・・・？

突然だが、みんなに一言言いたい・・・。

「俺は、死んで、ないっ！！」

なぜこんなことを行っているかという・・・

- 回想 -

「はぁ、今日もはずれか・・・」

俺はそんなことを言いながら

イスの背もたれに体重を預けた。

現在、俺は家族ですら簡単に入ってこれない部屋

つまり、M y R o o mにいる。

「くっそー、これで5回連続補助アイテムだー・・・」

知っている人は少ないと思うが

『G o t o f P e o p r e 失われた神器』

というオンラインゲームをやっている。

そのなかに

課金して、がちやと呼ばれるものをまわし、アイテムを手に入れるものがある。

基本は武器が出てきて

運が良ければ神器が出てくる。

だが、ここ数日俺は補助アイテム

つまり『あたったのはいいけど結局使わないでサービス終了になる』しか当たっていない。

「はぁ・・・。最近ついてないな・・・」

そう、今彼は絶賛不運中なのである。

道を歩けば、前の人の頭に花瓶が落ちてき
交差点に入ると子供が飛び出して

裏道を通ると女の子が連れ込まれている

と、なんともいえない場面に直面するのであった。

そして、彼は

所謂『お人好しジゴロ（無自覚）』

なのである。

降ってきた花瓶を受け止め

飛び出した子供ごと歩道に転がり

不良たちを一刀両断

と、ヒーローさながらの出で立ちである。

「・・・今日はもう寝るか」

今は3時47分

もう少しで朝日が拝める時間帯である。

こんな時間までオンラインゲームをやっている彼は
所謂「オタク」であった。それも重度の。

彼にとつては睡眠時間4時間は良くあることなので
特に気にせず布団にもぐりこんだ。

- 回想終了 -

と、いうわけで最初の発言に戻るわけだが、

「まじなんなのココ？」

俺の目の前には、真っ白な空間が広がっていた。

俺は「あれ？もしかして気がつかないうちに俺死んだの？」

とか思いながら、とりあえずそこらへんを歩いてみる。

と、そこに

「ちよつと待ってよ」

「うお?!」

・・・なんか変な幼女様が

「私は（21）じゃないよ」

「うお?!」

「・・・リアクションが同じだよ」

このお幼女様俺の思考を読みやがった・・・だと・・・!?

「だから幼女じゃないって」

「・・・お前は神か？」

「うん」

うん、て。うん、て。

・・・mjk

「うん、まじまじ」

「え?なにそのマジ恋の合いの手みたいな答え」

「あれおもしろいよね」

「うん、まあそれは認める」

と、そんなくだらないことを言ってるうちに

俺は、あることに気づいた。

「・・・ってことは、だ。俺は死んだのか？」

「ううん。しんでないよ」

「じゃあ、なんでおれココにいの?なんか良くある転生物の出だしに似てるんだが」

「それはねー、あまりにもお人好しなあなたをー、私たちがー、転生させようと思ったからなのー」

・・・どうやら俺は転生するらしい。

まあ、いまさらな感じがするが仕方ない。

とりあえず優先事項から聞いていつてみよう。

「俺は元の世界に戻れないのか？」

「戻るよー」

「そうなのか？」

「うん。でも、戻るとこちらから干渉しない限りもうココにはこれないけどねー」

どうやら俺は戻れるらしい。

とりあえず遣り残したことは心配しなくてもよさそうだ。
ふむ、だたつらくくに質問は

「あー、俺ってどこに転生すんだ？」

「それは行つてからの楽しみー」

・・・なんかものすごく不安になってきた。

知らない世界に飛ばされたらどうしよう。

とりあえずアニメの知識はそれなりにある。

小説も何とかカバーできる。

最近「ハイスールDxD」にはまっている。

「じゃあ、今からあなたの経歴から引けるくじを選びまーす」

「くじ？」

「てけてけてけてーん！」

無視された・・・。

「おお！神級チート4つ、究極級チート1つひけまーす」

「神？究極？」

「さあ、それではどれでなにをひきますかー？」

もう、いいです・・・orz

「ああ、くそっ！じゃあ、その神級つてので『身体能力』！」

「はいはい、じゃあ、ひきまーす」

お前が引くんかいっ！

「てけてけてけてーん！・・・『哀潤の10倍』だってー？なにこれー？すごいのー？」

「哀川さんキタ

／

「あう?!」

ちょwwおまww

哀川さんってだけでチートなのにその10倍って・・・。

なにこれ怖い・・・。

まじ鬼畜だ・・・。

＼(。・。)

。なんかこれから俺が倒すであろう敵がかわいそうになってきた・・・

いやだつて

人類最強ですよ？

人類最強なめんなつ！！

「・・・んー？なんかついてるー！えつと・・・」副賞として完全記憶能力と空間を操れる程度の能力を差し上げます」だつてー。すごいねー」

「・・・」

なんかもうこれだけで誰にも負けない気がするぜ。

「じゃあ、次いつてみよー」

「えーつと、じゃあ、究極級の『顔』で」

「フムーなになにー？」カラル君やセバスチャンも真つ青なイケメンにはやがわりー！これであなたにもモチキ到来間違いなし！！」だつてー。よかつたねー」

「うつほほおい！」

え？なにそれ？

俺が知ってる中でも1位2位争うほどのイケメンやん。

マジ俺どうなんの？

「はいはい、つぎつぎー」

へいへいわかりましたよ。

「じゃあ、神級で『能力』三つおねがいしやす」

「がつてんでー！よし！君に決めた！『固有結界・宝具全部使用可（魔力とか関係ないんで使い放題暴れ放題）』、『戯言シリーズに出てくる能力全部（使用している人物の熟練度の20倍）』、『ありとあらゆる魔眼（何度使っても失明しないし頭痛なし）とセイクリッド・ギア全部（熟練度は最大で、多重発動可）と全知全能（何でも知ってる。つか、天才×10000000000000000くらい）』だつてー。・・・あれ？どうしたの？なんか魂が半分ぬけてるよ？」

「いやー、なんといいいますか。ある程度最初の二つでやばいのである

んだろーなーと思ってたけど、ココまで鬼畜過ぎるとさすがに・・・
ねえ？」

もうマジ鬼畜

マジ吉だね

これはないわ。jk。

「というわけでー、使い方とかはー、かってにながれてくるとおも
うんでー、とりあえずがんばってきてねー？」

「なぜ疑問系!？」

「じゃあーねー」

「え、ちょ、まああああああああああああああ・・・」

「

そうして

下沼凌矢の無双の物語は幕を開けたのであった・・・。

P r a t 1 : 死んで・・・無いよね・・・？ (後書き)

自分で読んでて

「これはひどい」

って久しぶりに思いました^^

P r a t 2 : ・とりあえず、状況を・・・（前書き）

2 話目です

相変わらず暴走で駄文です

Prat2:とりあえず、状況を・・・

いじは・・・

「どこですか――――！！」

•

まあ、とりあえず現状を整理してみよう。

・ 廃屋（なんか血なまぐさい）

- ・預金通帳（パスワード・カード付）

- ・キャッシュカード

- なんか黒いカード

・紙（なんか怪しい）

・ ・ ・ うん、とりあえずこんなところか。

紙がなんだか怪しいんで、とりあえずあけてみましょう。

「ハロー、これをー呼んでーいるってーことはーとりあえずー無事

つてーことだねー」

「え、麻先輩？・・・は、置いていて、続き続き」
突っ込みたいところはほかにあつたが

話が進まないからとりあえず続きを読もう。

『これからーあなたはーこの世界でー生きてーいつてね』

「え、だからココどこよ？しかも、最後なぜゆっくり口調にしたし」

・・・ふう、まあ、いつか。

細かいことは気にしない気にしないー休みー休み。

・・・ん？まだ続きがあるぞ？なんか嫌な予感が・・・。

『P・S・

あ、そうそう。ゼウスちゃんがねー』これじゃ、たんなくね？』
とかー言つてーいたんでー次のーものをー追加しといたよー』

・お金（金額は見てからのお楽しみ）

・裏会カード

・見稽古（一度見ただけで秘奥儀まで修得可 想影真心の能力と重複することで雰囲気修得可に）

・氣を操れる程度（ドラゴンボール参照）

「・・・」

もはや何でもありっすね。

なんかもう、厨二とか痛くも痒くもないぐらいチートすぎて笑えないな。ハッハッハ・・・。

俺これからどうすりゃーいいんでしょうね。

まず、何この裏会カードとか。裏に『会員NO・0000000000

00』とか書いてあるし……。つか、会員俺一人だけかつ！

見稽古とかどこの病弱少女だよっ、て感じだな。

氣を操るのは……

うん？あつれー？なんか意外と普通に思える私は精神科に行ったほうがよろしいのでしょうか。

本気でそんなことを考えている今日この頃でした。

……。ま、まあ現実逃避はこのくらいにしといて。

「さてさて、お金はどのくらいあ……。る……。」

『5,999,999,999,999,002』

……。ゴシゴシ

『5,999,999,999,999,002』

5999兆！？

約6000兆じゃねーか！

つかなんだよこの『2円』！

なんで『2円』なんだよ！

『ああ、それはねーちょうど特売でー998円でー買いたいもの
ーあつたんでー使っちゃいましたー？テヘッ』

テヘっ……。じゃねーよ！

何人の金使つてんだよ！！

まあ、もらい物ですけどっ！！

ふう、なんかもう疲れた。

もう寝てやる。そうだ、もう寝よう寝よう。
寝よ——————————！！

Z
Z
Z
・
・
・
。

P r a t 2 : とりあえず、状況を・・・（後書き）

またとんでも設定が・・・

相変わらず駄文ですが

まだ続けさせてもらいます。

Part3…について、もしかして……(前書き)

どうも

今日二回目の更新です

相変わらずですが

よんでやってください

Part 3：ここって、もしかして・・・

・・・はあ。

やっぱり

「寝て目覚めたら夢でした」

的な展開はなかったか・・・。

よし、もう諦めよう！

今、俺にできることを全力でやろう。

・・・と、言うわけで

今俺は外の探索に来ている。

現在の時刻 4 時 3 2 分。

まだ早い時間だが

どこからともなく殺気が当てられている。

・・・ちなみに、今の俺の外見は 3 歳だ。

3 歳。でも人類最強。ココ重要。

さてココで能力の説明を少し。

やはりというべきか能力は俺の任意で ON・OFF できるようだ。

それに、あまり力を出し過ぎないように『身体能力』が 10 段階に分けてリミッターがかけられていた。『能力』のほうは特に制限がないらしい。ために『身体能力』のリミッターをかけたまんまでジャンプしてみたところ、50cm ぐらいとんだ。よもや、素でこんだけいくとは・・・。

まあ、いつか。じゃあ、今はこのくらいで。

・・・さつきから思っていることを整理してみよう。

まず、血なまぐさい。これはもう戦場といっているほどのにおいだ。あちらこちらに血痕がある。それから殺気から何回かかつて人であったであろう物も映っている。だが、吐き気などはない。さすが人類最強というべきか精神力も並ではない。それどころかさつきから若干殺人衝動が・・・零崎は発動しねーぞ、っと。

次に、建っているものほぼすべてが半壊で側面にはツタがまかれてある。どうしたらこうなるのか？ってほどの壊れ方をしている建物もある。

この時点で、もう自分がこの世界に飛ばされたかわかっていた。

そう、ココは

『暁の護衛』

の世界だ。さすがにココまで来れば嫌でも認めざるを得ない。

しかも、だ。俺が昨日目が覚めたところいい今時分が見てる景色と
いい原作中の

『禁止区域』

と、ひっじょーによく似ていた。

ということは、昨日俺は無用心なままねたということか・・・。今
になって寒気がする。

「・・・とりあえず今は原作中なのかそれとも以前なのか知るほう
が先だな」

とりあえず俺は、原作中で主人公（海斗）が使っていたアパートを
調べてみることにした。

「たしか、ここら辺に・・・お、あつたあつた」

しばらく歩いていると、ひときわ大きな建物の前にたどり着いた。
外からでもわかるほど殺気に満ちている。内心ものすごくビビッて

いるんだが、震えとかはない。さすがチートボディー。

「・・・ん？あれは柏と・・・須藤・・・っ！！」

くそっ！いきなり嫌なやつを見ちまった。須藤は俺が嫌いな男性キヤクターランキング2位だ。ちなみに、1位は当然のごとく中里亮である。

「・・・さてよ？今あいつがココに要るってことは・・・まさか！」

確か百合？って言ったかな。原作で、海斗の母さんが犯された拳句殺されるという最悪な展開があった。たぶん、今俺はそのシーンに出くわしていると思われる。須藤が嫌いになった理由がこれなんで、今から須藤をぬつ殺そうと思う。拒否権は無しだ。これはもう決定事項だ。

「そうと決まったら早速行動開始だ」

S i d e：須藤

ククク、今から俺は憎きあいつの“妻”を犯そうとあいつの隠れ家に向かっている。一目見ただけでわかった。こいつぁ、上物だ、とな。ククク、さっきから笑いがとまんねーな。さーて、そろそろ到着だ。犯して陵辱して鳴かせて殺してやる。ククク、“あいつ”の憎悪で固まったかをが思い浮かんでくるぜ。ククククククク・・・。

「やっとついたぜ」

俺はいま“あいつ”の家の前に来ている。今から楽しいことが始ま

る。

俺は、戸を蹴破り侵入した。

「動くな、殺すぞ？」

「っ!？」

ククク、驚いてやがる。お？ガキがいやがるぜ。だが、そんなこと
かんけーねー。どうせ最後には二人とも動かなくなるんだからな。

「今からお前を犯して陵辱して鳴かせて」

「殺してやる、か？」

『っ!!!???'』

突然放たれた強烈な殺気に

その場にいた全員が固まった。

Side: 凌矢

いやはや、さすがに心が広くて温厚で尚且つ優しい俺でもさすがに
我慢の限界ですよ。

まず、あの嘗め回すような目。今すぐつぶしたくなる。

あと、あのム力つく顔。今すぐコンクリートに埋めてやりたくなる。
そして、あの声。聞いただけで、四肢を切り裂き、のどを少しずつ、
決る様にして十分苦痛を味あわせた後、内臓をぶち撒かせながら殺
したくなった。

だから俺は

「投影、開始（トレース・オン）」

そういつて、手に『干将・莫耶』を投影した。もともと、この名前は
これを製作した夫婦の名前だとされ、『夫婦剣』として有名であ

る。『干将』（本来は『干将』）は陽剣（雄剣）、『莫耶』（あるいは『莫邪』）は陰剣（雌剣）とされている。だが、今俺が投影した『干将・莫耶』は、現物をはるかに超える。売り文句が『ミスリルでもアダマンドイトでも何でもござれ！この剣に切れぬものは何もない！』てなかんじだ。もちろん刃こぼれもしない。ランクだけならAと表してもいい切れ味だ。

ちなみに今俺は、空間を操作して他の人から俺の姿が一切認識できないようにして、声帯模写で「立木文彦」さんの声にしてある。その状態で声だけ聞こえたのである。つまり『声だけが聞こえる』というわけだ。こっちから殺気を飛ばしたり、声をかけることはできるが、相手からしてみれば、姿もなく気配もなくただ殺気が突き刺さり声が聞こえる、となんとモカオスな状況である。

「っ！だ、だれだ！？」

・・・やば、もう限界だわ。

もうだめ。

抑制できない。

人には本来『殺戮本能』と『抑制本能』がある。

今の俺は

完全に『抑制本能』が消え

後には強大な『殺戮本能』がのこった。

「黙れ。口を開くな。今すぐあの世に送ってやる」

そう言って、俺は須藤に切りかかった。

「ぐっ、ああああああ！くっそおがつ！」

「ついて来れるか」

まず、はじめに左腕を奪ってやった。須藤はとつさにその場で回し蹴りを繰り出したが、今の俺は身長が80cmぐらいなので当たらない。というか、当てられない。

俺はその場から瞬歩さながらな動きで須藤の背後に回って、足を切りつけた。

「うがああああああ！ぐああ！はあ・・・はあ・・・」

右足を『切断』し、そのまま左足にとつさに作り出した刃渡り30センチのダガーを左足に突き刺した。

これで、こいつはもう、逃げられなくなった。

ココまでの所要時間は約7秒だ。ちなみにまだ『身体能力』のリミッターははずしていない。

「っ・・・はあ・・・はあ・・・。貴様是谁だ？なぜ俺に攻撃する？」

「・・・ムカついたから。ただそれだけだ」

「こんのやろうがつ！」

須藤が俺のいる位置とは逆の方向に拳を振るう。などやっても無駄なものにな。

さて、もう殺そうか。うん、そうしよう。

「もう終わりだ・・・。理想を抱いて溺死しろ！」

そう言っただけで俺は須藤の首を飛ばした。見事にとんだ首は柏の足元に音を立てて不時着した。それを見て柏は逃げ出そうとした。

「待て」

「っ!？」

俺のその一言で柏は逃げるのをやめた。

そっだ、柏には原作通り海斗についていつてもらわなければならぬいしな。

「お前は、いま、こいつについてきてつみもない人を殺そうとした」
「?!」

「今、この人が死んだら、その赤ん坊はどうなる？誰が養う？誰が面倒を見る？・・・お前はそこまで考えて行動していたか？」

「・・・」

「今のお前は、人形と同じだ。いわれたことをやる、ただそれだけ。まったくもって馬鹿馬鹿しい」

「っ・・・!」

「どうやら今気づいたみたいだな。だったら、お前はこれからどんな行動をすればいいか、どうやって罪を償うか考えて考えた先に思いついた行動を実行しろ。それがお前の、お前なりの償いだ」
「わ、わたしは・・・わたしは・・・」

そう言つて柏はその場に崩れた。ふう、これで何とか大丈夫だろう。そう想い、今度は百合？さんのほうを向いた。もちろん空間操作をやめて、声も元に戻して。

「怪我はありませんか？」

「え?・・・あ、はい」

「そうですか」

「あの、あなたは？」

「え?ああ、まだ名乗っていませんでしたね。俺は下沼しもぬま 凌矢りょうや。3歳です。あなたは？」

「3歳!?...え?あ、はい。私はかn・・・朝霧 百合です。」

そしてこの子が海斗といいます」

ふむ、やはり予想通り。これで最悪の展開は避けられた。あとは、雅樹が来るのを待つ

「貴様は誰だ」

その言葉と同時にけりが背後から飛んできた。俺はとっさに前に転がり臨戦態勢をとった。

「須藤の死体・・・これをやったのはお前か？」

「ちょ、ま、待て！」

「・・・待つつもりはない」

再び蹴りが飛んできた。俺はバックステップでそのけりを避けた。さ、さすが雅樹。伊達に、天才の名をほしいままにしてない・・・。

「ま、雅樹さん！待ってください！」

「・・・どうした？」

雅樹は俺に目を向けたまま、百合の声に返答した。

「その子は、私を助けてくれました。ですから、戦う必要はありません」

百合はそう言って、俺と雅樹に笑顔を向けた。

「・・・どういうことだ？」

百合の発言に疑問の念を籠めて、問いただした。

「そのの．．．ひとが私を犯そうとした時に、その子が来て、その．．．須藤さん？を殺したんです」

「それは本当か？」

「ああ、事実だ」

「．．．そうか。早とちりしてすまなかった」

「いや、いいよ。どこも怪我してないし」

ふう、何とか雅樹の警戒を解くことができた。これでなんとか話を進められる。

Part3:ここにっつて、もしかして・・・(後書き)

うわー

やっちまいました。

戦闘とか酷いねもう。

うう、こんな駄文でも

読んでくれたらうれしいです。

できたら感想をください。

なんかおかしなところがあつたら指摘してくれたらうれしいです^^

でも、誹謗中傷はやめてください。

お願いします。

Part 4：あれから・・・（前書き）

どうも

4話目です

相変わらず構成がくそですが

Part 4：あれから・・・

あれから10年近くの時が過ぎた。

今俺は13歳。身長も170近くある。だんだん顔が完成されていく。

あの後、鏡を見たが、やはりまだ子供だったためかつこいいよりむしろかわいいの方が強かった。

そんな俺も10年という時の中で大分成長した。

能力云々は一通り使えた。やりすぎて、建物がひとつ崩壊したが・・・。まあ、過ぎたことはしょうがない。

余談だが、どうやら俺には『神の左手』別名『ガンダールヴ』の万能バージョンが追加されていた。

初めて『干将・莫耶』を握ったときにしっくり来たのはこのせいかと後になってわかった。その他にも娯楽のため、楽器に触っただけで使い方を理解し、引くことができた。絶対音感は前世からの引継ぎで初期能力で装備されていた。ためにファゴットで『雲梯』を使ってみたら、壁に穴があいた。零崎曲識恐るべし・・・。

他にも、『暴飲暴食』やら『操想術』を試してみたが、どれも問題なく発動。

「市井 馬」の能力を使おうとして、糸がないことが発覚した。

『王の財宝』の中を調べてみたら、一応あったはあったんだが・・・。いかせん、金ぴかだった。さすがギルさん。いやさすがつすね。

と、そんなこんなでどうしようと思んでいたところに『投影できんかな?』と思い、面白半分で作ってみたところ成功した。しかも、細さがミクロの世界とか無茶な設定で投影したので『さすがに無理があるだろう』と思っていたので驚いた。このとき、『想像』しただけで『投影』できたので『これはもしかして・・・』と思い、変な形をした箱を『想像』して『投影』したところ成功した。たぶん『

投影』と木場の『魔剣創造』とかいろんなセイクリッド・ギアとかが混じって万能になったのだろう。深く考えないようにしてそこで思考を切った。

で、海斗は今年で10歳になる。

性格は原作通りで天邪鬼だが、雅樹との間は悪くない、むしろ良好といっているほどだ。

5歳ぐらいのときから雅樹は原作通り、海斗を鍛えた。俺が傷を治せるとわかったからなのか、原作以上に海斗をいじめていた。そこに、俺も加わったからさあ大変。海斗君は原作以上の化けもんになった。まず、なぜか瞬動使える。ありえんよね。んで、眼力でひところせるんじゃない勝手ぐらいプレッシャーを半端なくだせる。まあ、雅樹や俺程じゃないが。百合は基本俺か雅樹がそばにいて、襲ってきたやつを返り討ちにしている。雅樹が海斗を鍛えるときは俺が家に残り、俺が鍛えるときは雅樹が家に残った。柏も協力してくれている。

もちろん雅樹は、社会勉強という名の犯罪を海斗に教えていた。まあ、さすがに実践はしなかった。おかげで俺がツキのフラグ回収せねばならなかった。海斗とは一応合わせたが覚えているかどうかかわからん。

そして、海斗は俺と雅樹の修行という名の虐めに耐え抜き、晴れて一人暮らしすることになった。

その際、柏もこっそりついていたのは内緒である。

「凌矢。お前はこれからどうする？」

「ん？俺か？ん、とりあえず影から海斗見守ってるわ」

「そうか・・・」

「そーゆー雅樹たちはどうすんの？」

「俺たちは人の少ないところでひっそり暮らそうと思う」

「そつか。じゃあ、俺もたまに顔出させてもらっ」

「ああ」

「・・・そういえば食料とかどうすんの？」

「そういえばそうだな・・・」

「あ、じゃあ、俺持っていくから心配スナ。遠慮とかいらん。断つても勝手においとくからな」

「・・・恩に着る」

「ああ、じゃあな」

そう言つて俺も海斗の後を追つた。1週間分の食料を残して。いやー、あの二人には幸せに生きてもらいたいものだ。あの人たちの馴れ初めを知っているだけ尚更。ほんと、なんで認めないんだろね。いいじゃん別に護衛が対象者と恋に落ちてても。そこらへん頭がかたいつつーかなんつーか。まあ、理屈はわかんないでもないが『本人達の意味を一番に考えるべきじゃねーか？』思想の俺にとってはそんなもの紙くずに等しいものだ。

「さてさて、海斗君はどこに・・・」

ビビビッ！

俺の原作キャラセンサーが反応してるぜ！

とりあえずそこらへんの搜索してると、海斗と赤髪の少女を見つけた。

顔を見てすぐわかった。あれは杏子だ。やっぱりかわいいな。

そんなこと思いながら観察を続ける。

あ、杏子が海斗についていった。ってことは助けた後か。

ちなみに海斗は“アキラ”（別名：中里 亮）にあつたらしく、そんな俺はあいにく家にいた。帰ってきた海斗からその話を聞いたとき、無意識に殺気が漏れていたらしく、その場にいた人が固まった

そうだ。

そうそう、さっきの話の続きになるが、食料とかも『投影できんのかなー』と思ってやったけど無理だった。仕方ないのでありったけの食料を時間の経過しない空間で作った『倉庫』に入れておいた。金がありすぎて困るとは思わなかったけどなっ！

まあ、そんなこんなで平和(?)な日常を過ごしていた。

「とりあえずは、海斗が死なないように見守っておくか」

そう言っただけはいいやつは海斗に近づく前に片っ端から潰した。偶に見過ぎすやつがいたが、さすがというべきか、海斗はやられるどころか返り討ちにしていた。『もう、俺がいる意味なくね?』と思ったが、とりあえず見守り続けた。

Part 4：あれから・・・（後書き）

今回は短いです
すいません

なんか無茶苦茶どころの話ではないですね
つながってないようなところあるし・・・

まあ、そこは、後々直しますんで今は勘弁してください
お願いします

P a r t 5 : 強敵襲来!! (前書き)

5話目です

相変わらず醜いですが

読んでやってください

Part 5：強敵襲来！！

あれからもう1年たった

え？

展開早くね？

うっせ

いいんだよ、何もなかったんだから

いや、あつたか・・・。

海斗がね、襲いに来たやつをね、ことごとく血祭りに上げてたわ。さすがに俺もあれは引いたわ。

なんだっけ？七刀刑？だっけかな。

あれ、グロ過ぎでしょ・・・。なんか吐き気してきたよ。

どこの中国の処刑方法だよっ！、って思ったね。

・・・あれ中国だっけ？

まあ、いつか。

まあ、そんなわけでもう俺が要らなくなったわけですよ。

佐竹登場までまだ少なくとも3年ぐらいはあるわけだし。

どーっすかなあ。・・・あ。いいこと思いついた。

ほら、俺ってさ？転生する前オンラインゲームでそれなりに有名なプレイヤーだったわけよ。んで、この状態でやったらどうなるのかなー、なんてこと考えたわけですよ。いや、ぜんぜん『もしかしたら無双できっかも』とか思ってたないよ？ホンとだよ？

と、いうわけで作ってまいりました。ネカフエ。

イヤー、久しぶりだねえ。何年ぶりだろ？前世で最後に入ったのが15ぐらいだから16年ぶりぐらい？つか、この世界にネカフエあ

ったのびつくりだわ。てつきりもうなくなってるかと思ったよ。よし、早速金払ってやろうか。あいにく金なら腐るほどある。ついでにさっき50万ほどおろしてきたつてもまだ5999兆9999億から動かないわけで……。こうなったら目いっぱい課金してやる……。。

「すみません。ちょっと、いいですかー？」

「はい、なんでしょう」

「利用したいんですけどー」

「じゃあ、こちらの中からコースを選んでください」

「んじゃ、7日間宿泊で」

「……。わかりました」

何その間？俺らんとくろでは結構普通だったけどな。やつぱりこつちだとちよつと……。いや、かなりやばかったりするのかな？この時間は。

まあ、そんなこと気にしても仕方がないか。ちっちゃいことは気にしない。これぞ凌矢クオリティー……。なんか違う気もするが気にしない。

「24000円の7日分なので16800円になります」

「はいはいー」

「……。20000円お預かりいたします。3200円のおかえしになります」

「あ、ども」

めんどくさいんで20000円出しちゃった。てへっ

……。ええ、わかってますよ。今のは気持ち悪かったって。だからね、それだけは勘弁してください。いや、マジで！すみません！ほ

んとに勘弁してください！あ、いや、ま、ちょ、あ、や、ま、アアアーーーーー……。

ふう、何とか帰ってこれた。マジ死ぬかと思っただぜ。そんなことはさておき、早速はじめますか。さてまずは何を……。

「これって……彩が海斗に勧めてたやつじゃ……？」

そう、何を隠そう！これは、海斗に彩が勧めてたゲームなのである。いやー、まさかこんな昔からあるとはねー。それにこれ一週間位前に始まったばかりらしいし。ま、さすがにこんな早くからいるわきやないよね。……いないよね？

「ま、まあ、とりあえず登録してやるとしますか」

んでやりはじめたわけだが。

「キャラクターメイキング細か過ぎだろっ！なかなか決まねーわ！……そうだ！海斗みたいに特定の人物に似せてやれば、或いは……」

うん、そうしよう！だれにしようかなー。やっぱり某『蛇』さんにしますか？そうだよな！よしそうと決まったら作るぞー！テンション上がってきたー！！

30分後

や、やっとできたぜ……。かなり細かい部分まで再現されてんじゃない？やば、早くやりてー。よし、オープニングも終わったし名

前は・・・『ベルム』にしよう。特に理由はない。チュートリアルは・・・要らんよね。百聞は一見にしかず。・・・なんか間違ってるような気がするが気にしない。

「おし、ようと決まったら一般の部屋に入って・・・戦闘開始だ！」「よろ」

「はい、よろー」

『がんばりましょう』

「そうですねー」

『初心者ですか？』

「そうですか何か？」

『わかんないことあったら、言ってくださいね』

「ご親切にどうもありがとうございますー」

と、いうことで会戦しました。よーっし、やあああってやるぜ！！

『sin1792さんが倒されました』

「はやっ」

『のぶよし様さんが倒されました』

「語呂わりーな・・・」

『いゃん、ばかーんさんが倒されました』

「勝手に倒されてろっ！」

・・・おかしい。まだ開始2分もたつてないぞ？いくらなんでも早すぎる。それに、この三人は同じ方向に進んでいったから、たぶん同じプレイヤーに倒されたと予想される。いったいどんなやつなんだ。興味がわいてきたな。

「お、敵発見。よし、ナイフでやってみっか」

おれは、ナイフ片手に突っ込んだ。敵もそれに気づき発砲してくる。だが甘いな。撃った瞬間に左右によければ当たりはしない。生憎、こちらら反射神経とかは半端ねーんだよ。しかも、入力の手速度も尋常じゃない。

「おうおう。動揺してやがんな」

敵はとうとう乱射してきた。だが、狙いの定まらない射撃ほど恐くないものはない。懐に入り、一気に首を掻っ切る。

『ベルムさんが敵を倒しました』

おし、一人目。お次は・・・お？三人一緒か！よし、だったら俺の十八番の『ハンドがんでヘッドShot！！作戦』開始だ。そう考えて、武器をナイフからグロック19に持ち替えた。

「おらおらおら！死神様のお通りだー！」

まず、ジャンプしてるやつの頭に狙いを定め・・・Shot！！

『ベルムさんが敵を倒しました』

よし、一人目。仲間が死んだからなのか残りの2人が周囲お警戒し始めた。すぐに俺は見つけた。だが、そのときすでに凌矢は動いていた。2人のうち右側にいたやつに接近していく。右側のやつは接近してくる俺に気がついて照準を合わせるが、ときすでに遅し。2人目も凌矢のグロック19の前に遭えなく沈んだ。

「んー、グロックも扱いやすいんだが、俺的にはやっぱりベレッタM92がいいな」

そんなことを考えながら3人目も葬ってやった。

「さーって、敵さんは・・・あいつ、できる・・・」

こっぴどくむかって来るやつが一人いる。だが、明らかにさっきのやつらとは違う雰囲気を持っている。何でわかるかって？んなもん感覚。

「さーって、どこまで俺を楽しませてくれるのかね」

S i d e : ? ? ? ? ?

さっきから私たちのチームの人がたてつづけにやられています。その中には、なかなか強いプレイヤーさんもふくまれています。

(いったい何が起こったのでしょうか?)

そう思い、やられた人たちのいたほうに進んでいきます。そうしていると、私のほうに敵さんが近づいてきました。どうやらランクを見る限り初心者ようです。

(外見が某『蛇』さんにそっくりなのは、この際突っ込まないようします)

でも、この後、初心者だと思ってあなどっていた私は激しく後悔しました。

S i d e : 凌矢

「まず手始めに・・・よつと」

相手に近づきながら牽制程度にA k - 47を連射する。案の定敵は左によけて、建物の陰に隠れた。俺はすぐさま獲物をグロック19に切り替え、相手に気づかれないうちに少し距離を置きながら近づいた。・・・ん？何か黒いものが

「！？閃光弾かつ！！くそっ」

俺はすぐさまその場から後ろに下がりながらグロック19を建物の陰があつた周辺に連射した。

「確かこちら辺にも陰があつたはず・・・っ！」

残りライフは・・・27か。大分削られたな。追つてこなかったところを見ると、相手にも多少なりとダメージを与えたかもしれない。

「こっちは・・・手榴弾か・・・」

・・・ふふふ。この俺が昔何と呼ばれていたかご存知だろうか？『ブラインド・エクスプロージョン』

簡単に言つと『死角から爆弾が！』みたいなもんだ。

たぶん、相手もさっきの俺と同じように少し距離を置きながら来るはずだ。

「だつたらこの角度で・・・っ！」

手榴弾のピンを抜き、壁に向けて手榴弾を投げ反射で中央で爆発するようにした。

どがーん

手応えはあった。だが、ログが流れてこない。

「まだか・・・」

とりあえずナイフに武器を替え、陰から出る。

「っと、アブね。・・・お？ナイフに切り替えやがった」

ハンドガンで牽制してきたのを避け、相手との距離をつめる。敵もナイフに武器を替えた。俺とナイフで殺り合おうなんて、たいしたやつだ。

「じゃあ、本気で行くぜ！」

まず俺は、相手に近づき牽制程度に横に薙ぐ。敵は、バックステップでそれを避け、ナイフで突いてきた。俺はそれを左に避け、ナイフを横に薙いだ。一応、相手に当たったが決定打にはならなかったようだ。両者の間に静寂が訪れた。

「次で決める・・・！」

俺はそう思い、相手に“突き”をかました。その後ログが流れた。

『ベルムさんが敵を倒しました』

・・・ふう、何とか倒せたな。それにしてもきつかった。残りライフが2だ。もしあそこが突きだったら俺は確実にやられてたな。もうたかいたくねーな。あいつとは・・・。

その後はあいつと鉢合わせすることも無く、順調に敵戦力を削っていき、ランキングでも一位に躍り出た。

・・・え？

そんなライフで死ななかったのか？

って？

当たらなければモーマンタイ。

P a r t 5 : 強敵襲来!! (後書き)

なんか結構要らない章になった気が・・・

ま、まあ、気にしないようにします、はい。

Part 6: さつきの敵は次戦の友? (前書き)

6 話目です

今回も変な感じですが

がんばります

Part 6：さっきの敵は次戦の友？

『おつ』『おつかれー』『乙』『おつでしたー』

「はい、おつー」

さっきの先頭で共闘した連中と軽い挨拶を交わす。

『それにしても、さっきはすごかったですね>>ベルムさん』

「いえいえ、それほどでも、っと」

『そうそう 孤高の赤神 を一人で倒すなんて私たちではまず無理ですよー』

「 孤高の赤神 ？」

「はい。開戦当初からギルドに属さず、戦闘ランキングで1位ばかり獲得しているプレイヤーです」

「へえー。そんな人さっきいましたっけ？」

『何言ってるんですか？さっき倒していたじゃないですか。一人で』

「さっきって・・・もしかしてあの化け物みたいに強かった人ですか？」

『です。まあ、ベルムさんも人のことはいえないですけどね』

「ははは、偶然ですよ」

ふむ・・・。さっき俺と互角に戦ったプレイヤーはなかなか有名なようだ・・・。ってことは、だ。その有名なプレイヤーを倒したってことは、いろいろと目をつけられるかもしれないな。うーん、どうしよっかな・・・。

・・・あ、そうだ。自分でギルド作って誰も手を出させないようにすればいいんじゃない？・・・よし、これでいこう！そうと決まれば早速・・・ん？

『フレンド申請待ち1名』

「フレ申？誰からだろう？」

そう思い詳細を見てみると、そこにはさっき激戦を繰り広げたプレイヤー名が記されていた。本文は短く

『お友達になってください』

だけだった。それを見た俺は

「もちです。よろしくお願いします、っと」

とりあえずそう返信しておくことにした。それに、承認ボタンを押すのも忘れない。よし、これで晴れと俺にもお友達第一号さんができたわけだ。しかも強い人。これから楽しくなるぞー。そんなことを考えていると、個人回線が入った。

『ベルムさん>>承認していただきありがとうございます。これからよろしく願います。ところで、ベルムさんはどのギルドに加入するか決めましたか？』

「ん？・・・はい、こちらこそ願います。ギルドは自分で建てるつもりです」

『そうなんですか。でしたら、一緒に作りませんか？』

・・・おお。いきなりのトンでも発言に一瞬脳がフリーズしてしまいましたでございます。

・・・え？まだしゃべり方がおかしい、って？・・・こまけえこたあいんだよお。・・・すいません。少々取り乱しました。

それにしても、うゝん、どうしようか？さっきの戦いぶりからして、足を引く張ることは無いなさそうだしなあ。・・・よし、決めた！この人と一緒にやるのも楽しそうだし、受けてみようかな？

「こちらはいかがですが、自分なんかと組んでいいんですか？」
『はい！私のほうこそ足を引く張らないようにがんばりたいと思います』

・・・なんかこの子、ええ子やなあ。・・・つとあぶないあぶない。また思考が飛ぶところだった。

「じゃあ、こちらでギルド建てますね」
『あ、はい』

さてさて、ギルドはどうやって・・・

「あのゝ、つかぬ事をお聞きますが、ギルドを建てるためには課金しなければならんですか？」

『あ、はい。そのようですね』

「あゝ、じゃあ、今から課金しに行ってくるんで待っていて下さい」
『わかりましたゝ』

そう言っただけ早く課金できるように、早足で課金しに行った。まあ、早足つつつても、一般の人の全速力みたいな速さだけどな。

P a r t 6 : さつきの敵は次戦の友？（後書き）

はい、今回も駄文です

なんか学校で書いていたら

変なことになってしまいました

すいません・・・orz

Part7:ギルド名は・・・(前書き)

7話目です。

だいぶ感想が荒れてきましたが

そんなのきにしません。

というより、私の名前で殺人鬼さんの悪口言った人は
もう、感想とか書かないでください。

気分が悪くなります。

Part 7: ギルド名は・・・

課金しようとして外に出たのはいいが、コンビニが見つからない。俺は、いつもコンビニからの経路で課金していた。それ以外の方法はまったく知らない。つか、コンビニに経路以外の課金方法ってあるのか？それすらもわからん。

「うーん、どこだ？・・・お？あつたあつた」

やっと見つけた。でも、たぶんネカフエからココまで2kmぐらいはあるぞ？俺だったから3分ほどでこれたが・・・。とりあえず、さっさと課金して戻ろう。

ウーーン

「いらっしやいませ」

お？ココのコンビニの定員さん結構愛想がいいねえ。俺の住んでいたところの近くのコンビニとか『っしやいあせー』だったぜ？もつとひどいときは挨拶すらしねえの。ま、いいけど。俺は必要最低限の会話しかしき無いタイプ・・・でもないか。

んじゃま、さっそく課金を・・・して・・・。

「いくら課金すればいいんだ？」

そう、俺はいつたい何円課金したらいいんだろうか？今手元には、48万と3200円ある。ここは景気良く2万円使えますか。うん、そうだね。ケチって後悔はしたくないしね。金なら国家予算

よりはるかにある。つか、ありすぎだろうよ、どう考えても。

・・・あとで難民救済募金とかに援助しようかな。

・・・うん、そうしよう。今、こうしている間にも困っている人は世界中にいるんだ。いき照る抱けども幸せと思わなきゃな。

つとと、なんかまた思考があらぬ方向に・・・。
まずは課金しないと。えーっと、2万円2万円。

ウィーンウィーンウィーンウィーン ビリッ

よし、後はこれをレジまでもって行って

「に、2万円になります」

「はい」

「は、はい、2万円ちょうどお預かりいたします。レシートはいりますか？」

「あ、はい」

・・・なんであんなにキョドッてるんだ？あの人。あ、俺が課金しようとしているからかな？ん、でも、普通に課金の紙用意してるしなあ。・・・もしかして、俺の格好変だと思ったからかな？そりゃ、まだ5月なのにドクロのついたTシャツ着てればそう思っても仕方ないか。俺も思うもんね。『こいつ寒くねえの？』って。まあ、俺は氣とかいろいろできるからぜんぜん寒くないんだけどね。

ちなみにこの服も『投影』して作りました。いや、『投影』って便利だねっ！もう、何でもできちゃう！あ、食いもんは無理か。

とりあえず、早くネカフェに戻ろう。

数分後

・・・ソロモンよ！私はかえってきたああああゴホッゲホツブヘツ・・・。

慣れないことはやるもんじゃないね、ホント。

ホントは最後、のばすつもり無かったんだけどなんとなくのりでのばしちまった。

「ただ」

『おかえりなさい』

「は、じゃあ、かえます」

『ええ？！そっちのお帰りなさいじゃありませんよ！？』

「冗談ですよ冗談」

『むう・・・』

まあ、この人をいじるのもこのくらいにして、さっさと課金しねば。えーっと、確かこれをこうやって・・・よし、いった。

・・・おお、反映されてる。

じゃあ、まずギルドを立てて・・・あ。

「えーっと、ギルド名何にします？」

『あ、そういえば決めてありませんでしたね』

「はい、そうなんです」

『じゃあ、ベルムさんが決めてください』

「うーんそういわれても・・・」

『じゃあ、私の通り名の一部とベルムさんの格好の元キャラを足して【赤蛇】なんてどうでしょうか？』

「【赤蛇】・・・いいですね。それにしましょうー！」

『はいっー！』

よし、ギルド名決まった。えーっと、後はギルド紹介文・・・は後でいいから、次。
なにになに？

『ギルド設立おめでとうございます。当ゲームでは月に数回程度、ギルド対抗戦を開催する予定となっております。つきましては、そのご説明をさせていただきます。』

1・戦闘に参加できる人数の上限は15名まで。（それ以下なら何人でもかまいません）

2・敵対ギルドはこちらで決めます。（抽選で決めたいと思います）

3・参加する場合は、ギルドメニューの『参戦』ボタンを押してください。

4・開催は事前に手紙でお知らせいたします。

以上で説明は終わらせていただきます。では、ご武運を』

ふむ・・・。なかなか興味深いものを見たな。ちょっと話してみるか。

「ギルド同士で戦闘できることは知っていましたか？」

『はい、この間やっていました』

もうやったのか。ってことは、もうしばらくはなさそうだな。

じゃあ、ポイントもまだ結構あるし何か買おうかな。

ふむふむSIG SG550にFAMAS F1。

・・・おおM24　SWSもある。
なかなかいろんな種類のものがある・・・だと・・・？

ベレッタM92・・・だと・・・？

まさかこんなところにあるとは・・・。しかも課金武器。それに、
どうやらこのゲームにはギフト機能があるらしい。

・・・よし、決めた。

「えと、ベレッタM9もってますか？」

『？いいえ、持ってませんけど・・・？』

「そうですか」

よし、じゃあ、ベレッタを2丁買って片方を送って・・・。

『なんかきました』

「開けてみてください」

『あ、ベレッタM92・・・』

「はい。それは、今日という日を祝って僅かながら贈り物です。と、
いうよりこのギルドに入った人にもれなく渡すつもりです」

『そうですか。ありがとうございます^^』

「喜んでもらえて何よりです^^」

ふむ、これはいいかもしれない。ギルド紹介に『ベレッタM92必須
(こちらでくばります)』とでも書くか。うん、そうしよう。

こうして、俺は無事？ギルドを建てることができた。

Part7:ギルド名は・・・(後書き)

なんかもう無理です。

文が思いつきません。

早く本編始まらせないと。

誹謗中傷の感想はおやめください。

哀れなだけなんでw

Part 8：能力封印（前書き）

8話目です

10000PV突破しました

ありがとうございます

Part 8：能力封印

ギルドを立ててから3年とちょっとたった。

・・・え？

展開が早く？

き、気のせいさ。別にギルド建てた後特に大きなイベントが無くて、書くことが何にも無かったってわけじゃないんだからなっ！・・・はい、嘘です。ただめんどくさくなって書きませんでした。すいません。だが後悔はしていない！無論、反省もしていない！謝っただね。

まあ、そんなわけであの日から順調にギルメンを増やしていき、今では最強ギルドとして有名になった。そして、俺にも二つ名がついたんだ。

【イリーガル・ダイセクト】

直訳すると『闇を切り裂く』って意味になる。なんでもベレッタM92で悪そうなプレイヤーを片っ端からやつつけてたときについた名前らしい。つか、正直、恥ずい。なにこれ？厨二全開ジャン。絶対つけたやつ面白がつてつけただろ・・・。くっそー、もっとかっこいい名前にしてほしかった。これ、本音。

ちなみに、ギルドメンバーには、加入した時点でもれなくベレッタM92をプレゼントしている。ギルド規則で『ハンドガンはベレッタM92だけ』と決めているので、みんなベレッタM92を装備し

て戦っている。まあ、相手からしてみたらみんなベレッタを使っている、さぞ奇妙な集団にうつってることだろう。まあ、そんなの関係ないけど。要は、強いかわいかわい。俺とか幹部クラスになるともう一騎当千どころの話じゃないくらい強い。べつに、平のギルメオンが弱いつて言うわけじゃない。俺たちが以上なのだ。

さて、話は変わるが海斗は今たぶん15歳になっただろう。となると、ここでひとつのイベントが思い浮かぶ。

そう、佐竹が海斗に接触するあれだ。

原作では、雅樹は死んでいる設定になっていたから海斗が佐竹をボコッていたが、この場合はどうなるんだろうか？百合さんの病気は俺の氣を使った治療で治したから、原作では死んでいるはずの2人が生きている。海斗は、佐竹を雅樹に合わせるんだろうか？それとも嘘をついて追い返すのだろうか？ここら辺で海斗がボディガードになるかならないか決まると思う。

・・・あれ？どっちにしる海斗は憐桜学園に行く気がする。もしかしたらここはあまり気にしなくてもいい気が・・・いや、一応見ておこう。

禁止区域

ココには週1、2のペースで来ているから、あまり変わったようには思えない。・・・たぶん、俺の氣のせいだと思うが、この前来た時よりも氣の数が減っている。・・・あ。そういえば原作で『海斗が表の禁止区域一人で占めた』って誰か言っていたな。となると、この氣の少なさは海斗がやったのかな？たぶんそうだな。雅樹がやると思えんしな。

ちなみに、雅樹と百合さんは相変わらずラブラブです。雅樹も原作と違ってかなり性格がまるくなってるし、百合さんもかなり優しいし。やっぱり百合さんを助けたのは正解だったな。うんうん、やっぱりこういう夫婦を見てるところでちまで心が温くなるな。

・・・そういえば、皆さんには嘘をひとつ言いました。それは、『身体能力』についてです。前は『リミッターをかけているから全力を出せない』と申しましたが、正しくは『俺の力があまりにも弱過ぎてリミッターをはずせない』だけです。

はい、そうです。見栄を張っていました。すいません。

・・・だつてさ『君はあまりにも弱過ぎて、リミッターは最大1つしかはずせない』とか言われたんですよ？そつから悔しくなって必死に鍛錬して何とか今では3段階まで開放できるようになったけど・・・。最初言われたとき『俺、チートもらった意味なくね？』と思つてマジ泣きましたよ。

まだ、7段かも開放できるわけだし。でも、あれから一向に開放できる気がしないんだよね・・・。ココが俺の限界なのかな？・・・たぶんそうだろうな。それ以外に考えられないしな。はあ、ホント俺ってなんなんでしょうね。神様からもらった能力もまともに使えない。そのくせ、一応最強。なんかこの半端加減がたまらなくいやだ。

・・・よし、決めた。ほとんどの能力封印しよう。さすがに『空間を操れる程度』とか『氣を操れる程度』とかは無理だけど・・・。そつだなあ。とりあえず、固有結界は『投影』以外使わないようにしましょう。もちろん『王の財宝』もだ。後は『聖母の微笑み』以外セ

イクリッド・ギアは使わないようにしよう。『魔眼』とか『戲言シリーズの能力』とかは、何かと役に立ちそうなんで、主に補助的な意味で使うとしよう。『全知全能』とか『ガンダールヴ』は封印するとかそういう問題ではないので、そのまま。

ふう……。とりあえずこのくらいで良いだろう。もちろん『身体能力』も1段階までしか開放でないようにしよう。これで大分制限がかかった……。はずだ。それでもまだまだチート級とか超えているがであるが、そこはもうどうしようもないな。

ま、今日はここぐらいにして海斗の様子を見に行くとしますかね。たぶん、今日も杏子と一緒にやってると思うが……。

そんなことを思いながら俺は海斗が住んでいる家に向かった。

Part 8：能力封印（後書き）

短過ぎて・・・orz

カワウソさんにいろいろ指摘してもらいました。
でも、私ではどうにもできないところは
ご都合主義発動ということで
勘弁してください。

最近私は『Agape』をよく聴きます。

「Would you call me if you need
my love?」
ってね^^

いいきよくだなー

Part 9：佐竹マジ敵つい・・・（前書き）

9 話目です

今回ついに佐竹を出します

Part 9：佐竹マジ敵つい・・・

ドンドンドン

「おい、海斗。いるか？」

シーン

俺は海斗の名前を呼びながら戸をたたいた。だが、返事がない。おかしいな？海斗の家ってココであつてよな？俺の知らないうちに引越したとか・・・？ま、まさか、殺られたりとか・・・。まあ、そりやないだろうな。普通に考えて食料調達に行つたか散歩（狩り）に行つたかな。

「うーん、間が悪いな、海斗は」

・・・あ、この場合は俺が悪いのか？もしかして俺って間が悪い？・・・たぶんそうだろうな。何かと昔から運が悪かつたし『これ絶対誰か仕組んだだろ』とか思う出来事も日常茶飯事だつたし。そのおかげでいろんなことに対応できるようになったのは、うれしい誤算だ。その分、苦労が絶えなかつたが。でも、こつちの世界に来てから、それがめつきり減つた。これも神様のおかげかな？・・・たぶんそうだろうな。こんなヤバイ『能力』をくれるぐらいだし、俺の運を操ることは赤子の手をひねるのより簡単かもしれない。

・・・知つてるか？赤子の手をひねるのって案外難しんだぜ？だつてさ。あんなちっちゃい生き物に手を上げるとか、主に精神的になりのダメージを被ることになる。まあ、そんなことも平然とやつ

てのける鬼畜もこの世の中にいることだろうがな。

・・・ちなみに俺は鬼畜じゃないぜ？

え？何その疑いのまなざし？

いや、マジで俺鬼畜じゃないし。いや、ちょ、やめ、待て、いや、待つてください。お願いします！ホントマジでっ！ホント俺鬼畜じゃないから！みんなに言いふらそうとかその考えやめて！俺殺されるううう。（主に社会的な意味で。・・・まあ、ぶっちゃけこの世界に社会とか関係ないけどね）

・・・さて、おふざけもこのくらいにして。

さすがにいつ帰ってくるかわからないしな。今日のところは雅樹たちのところに厄介に・・・あ。

今思ったんだが、海斗の氣探ってそこに行けばよくね？・・・物は試しだ。海斗の氣は、修行（という名の虐め）をしていたときに覚えたし、やってみるか。まずは、精神を落ち着かせ俺の氣をあたりに撒き、一氣に探る。・・・お？発見。こっから、東に100mぐらい行ったところにいるみたいだ。んで、もうひとつ俺の知らない氣があった。

・・・あつれー？

もしかして佐竹きた？

この時期からして海斗に接触してくる人物はあいつぐらいしかいないはずだ。つか、タイミングよすぎね？・・・深くは考えないようになしよう。考えるだけ無駄だしな。

よし！んじゃ、行きますか。

もちろん海斗に見つからないようにだけど。

海斗がいるところの近くに移動

さあて、やってまいりました！今絶賛海斗と佐竹が交戦中です。さてどうしてこんなことになったか簡単に説明すると

佐竹接触 「雅樹はどうしてる？」 「なぜ親父の名を知っている

？（怪しいやつだな。ハゲでサングラスかけてるし）」 「友人だ」

「嘘をつくな（とりあえず負かして本当のことをはかせるか）」

戦闘

とまあ、こんな感じだ。実際はもつと会話していたが、めんどくさいのでそこらへん省く。それにしても、海斗のやつ完全に遊んでるな。つか、佐竹もよく防いでるな。・・・あ、なんか海斗言ってる『お前を認めてやる』だって。あのくだりか・・・。つーと、佐竹がボコられるわけだが。また来るまで待つのもめんどいから、とりあえずここら辺でやめさせるから。

「そこまでだ、海斗」

「っ！？誰・・・、って師匠か」

「・・・誰だ」

「だから凌矢で良いっていつも言っているだろ」

「いや、一応けじめはつけないと思ってな」

・・・やっぱり海斗ってかっこいいよなあ。なんかこう、独特の雰囲気があるっつーかオーラがあるっつーか。そこに痺れる憧れるう！つか、佐竹が困ってるw

「まあ、いいか。それと、その男 佐竹明敏は雅樹の“元”友人だ」

「・・・“元”」

「ああ、今はどうかかわからない、っていう意味でだな」

「ふん」

「・・・なぜ俺の名前を知っている？」

「ん？ああ、それは俺だからだ」

・・・ははは。『何言っただこいつ』的な視線を佐竹から感じる。まあ、俺もそんなこと言われたらそう思うわな。まあ、それは良いとして、俺はぶっちゃけ佐竹を雅樹たちに合わせることにした。そこで何が起るかは俺も予想できない。

「そんなことより、お前、雅樹に会いに来たんだろ？」

「・・・そうだ」

「んじゃ、ついて来い。・・・海斗。お前もだ」

そう言っただけは歩き出した。海斗は『俺関係無いよな？』みたいな顔して帰ろうとしたので、一緒に来るよう促す。渋々、という表情だったが、どうやら素直についてくるらしい。佐竹はいまだに疑いの視線を向けてくるが、俺が気にせず歩き出したからなのか、数歩後ろからついてくる気配がある。んじゃ、いきますか

雅樹夫妻の家

「久しぶりだな、雅樹」

「・・・佐竹」

入って早々佐竹が雅樹に声をかけた。どうやら雅樹も無表情だが驚いているようだ。・・・ん？なんで無表情なのにかかったかって？それはな、一瞬眉毛が『ピクッ』ってなったんだよ『ピクッ』って。

まあ、そんなわけで少し陰悪なムードになりつつある。しかし、そんな二人の間に割ってはいえる勇者が

「お久しぶりね、佐竹さん」

「・・・神田川嬢」

「“朝霧”です」

・・・はつきり言おう。『朝霧』といったときの百合さんはものすごく怖かった。雅樹ですら引くぐらいに・・・。俺が、氣を使って病弱を直してから、こんな感じた。俺も、ここまですごい威圧感を持っているとは思わなかった。海斗も、なんか汗かいてる。そういう俺も・・・（汗）

「ところで、雅樹さんに何か用でも？・・・それとも私かしら？」

「・・・いえ・・・雅樹に少し」

おお、佐竹が引いているwwこれは面白いww

ま、まあ、冗談はこのくらいにして

「佐竹。俺になんのようだ？」

「あ、ああ、それは」

そう言ってなんか話し始めた。雅樹は目を瞑りながら険しい顔をしている。まあ、話が話しだしな。

そんなこんなで、佐竹が『話は済んだ』みたいな顔をしてひと段落着いた。あれ？海斗のことは？

「・・・これはあくまでも提案なんだが」

「なんだ？」

「海斗を私に預けてくれないか？」

「どういう意味だ？」

佐竹はそこで自分が学校の校長をやっていること、それは憐桜学園であること、そこに海斗を入学させたいということを話した。

「ふむ・・・」

「どうだ？」

「いくつか条件がある」

そう言って雅樹は経歴に自分たちの名前を載せないこと、学費を佐竹のほうで持つこと、海斗の願いは極力聞き入れることなどを条件にした。

「わかった。その条件を飲もう」

「交渉成立だ」

「・・・さて、俺の意思はどうなる？」

今までずっと黙っていた海斗が不機嫌そうに口を開いた。まあ、そりゃそうだな。勝手に自分のことを決められたら俺でもそうなるわ。

「そんなもの」

「最初から」

『ない』

「・・・」

まさかのコンビプレー発動！これには海斗も啞然としている。かくいう俺も開いた口がふさがらない。まさか雅樹と佐竹がこんなネタにはしろうとは・・・。原作のキャラ崩壊もいいところだな。まあ、

ほとんど俺のせいだと思うが。

「それにこれはお前のためでもある」

「・・・ツチ。わかった」

海斗はいかにも『めんどくせー』という顔で承諾した。よしこころ
辺で

「じゃあ、俺も行こうかな」

『え?』

何その変なものでも見たような顔は。しかも百合さんまで・・・。
軽傷ついたわ。

「まあ、経歴云々は書けないが、金ならあるぞ?」

『え?』

だから何その顔。いや、銀行強盗とかしてませんよ? いや、マジで
皆さんわかるでしょ? このどうしたらいいかわからないほど莫大な
財産を。ええ、だから銀行同等とか百害あって一利なしなわけす
よ。

「佐竹。わかったな」

「・・・わかった」

こうして俺も憐桜学園に通えるようになった。

・・・え? 展開が早い?

そこらへんは気にしないで。

ご都合主義発動だから。

ど
う
い
う
意
味
か
っ
て
？
俺
も
わ
か
ら
ん
！

Part 9：佐竹マジ敵つい・・・（後書き）

キャラ崩壊がひどいww

しかもかなり無理やり過ぎる

何でそこらへんは軽く受け流してください

おねがいします。

Part 10：憐桜学園・・・（前書き）

すいません

投稿が大分遅くなりました

ちよつと風邪気味です

せきが止まりません。

Part 10：憐桜学園・・・

憐桜学園入学式

「ついにやってきたわけだが・・・」

「・・・ああ」

『・・・無駄にでかいなあ』

そんな感想を俺と海斗は同時に漏らした。実際、敷地面積やらはかなりでかい。たぶん一軒家が50くらいは入ると思う。いや、マジで。こんなことで嘘ついても仕方がないんで正直に言うておく。施設とかもあわせたらもつと良くかもな。

まあ、そんな感じで少しの間ほうけていたわけだが、そこでちょっとした問題が

「お前たち、校門の前で何をやっている。邪魔だ」

はい、みんな大好きソントク君です。

・・・まさかこんなしょっぱな「おい、聞いているのか？」から遭うとは思っていなかった。つか、やっぱり「貴様ら、この僕を無視するつもりか!？」ソンはなんか不機嫌そうだな。何で不機嫌なんだろうな?・・・まあ、そんな「僕を誰だか知ってそんな態度をとっているのか!？」こと思っても仕方がないか。

とりあえず邪魔になってるっばいんでさっさと中に良くとしようか。

「いいだろう。貴様らが」

「海斗。そろそろ入るか」

「そうだな」

「僕を無視するならこちらもそれ相応の態度を・・・え？」

なんかソントク君だ騒いでいた気もするが、たぶん気のせいなんで、気にしないでおこう。うんうん気にしたら負けだ。まだなんか「おい、貴様ら待て！」とかいつているような気がするが、気のせいなので気にしない。

そんなことで体育館に入ったわけだが、男しかいなかった。なんともむさい。そんなことを思っているといかにも『教官』っぽいひとが口を開いた。

「貴様ら、静かにしろ！」

シーン

最初から静かだったので、特に変わりはない。つか、何でこいつわざわざ言っただ？あれかな？頭でもおかしくなったのかな？それとも耳が遠いのかな？まあ、どちらにせよいい病院を知っているの俺がわざわざ教えてやる。

「早急に駅前の病院に行ったほうが良いんじゃないか？」

・・・どこかのイカ娘風にいうつもりはなかったんだが、なんか自然にそうなった。これはヤバイ。俺も行かなきゃならなくなる。それはマジ勘弁だな。

「おい、貴様！」

『・・・』

「おいそこの貴様！」

『・・・』

「無駄にハンサムな貴様だ」

『え？俺？』

「ちがう！6列目の左から3番目の貴様だ！」

いったいどのドイツだ？初日から教師に目をつけてるやつは。確か6番目だよな。おろ？俺の列ジャン。んで、左から3番目だったよな確か。・・・あれ？・・・俺？

「・・・あれ？・・・俺？」

「貴様以外に誰がいる！」

「いっばい」

「そういう意味じゃない！」

・・・あーこいつ、俺の嫌いなタイプだわー。俺が通っていた高校にもいたが、いつも大声で話して、生徒を威嚇してるやつ。しかも、なんか見下した眼してくるし。人は、生まれつき平等なんだからそういうやつは、人生を一度やり直したほうがいいと思う。

まあ、今はそんなことより面倒だが、こいつの相手してやるか。ホントに面倒だが、仕方なく。

「なんだ？」

「教師に向かつてなんだその口の利き方は！」

「まだ入学していないから、俺はココの生徒じゃない」

「もんをまたいだ時点で、ココの生徒だ！」

「・・・仮にそうだとしても、人は生まれつき平等だ。教師だろうとなんであろうと、対等なことには変わらない」

「貴様・・・っ！」

俺が真面目に答えてると、大声威嚇教師（以降『だい』）は、俺に近づいてきた。拳を強く握って。

「なんだ？やろうつてのか？」

「・・・良いだろう。どうやらお前は少し痛い目にあわないと理解できないようだ、なっ！」

そう言っていきなり殴りかかってきた。普段、過激な殺し合いをしているのでこの程度の速度ならたやすく避けられる。だが、俺はあえて避けなかった。

ガスッ

「・・・これで終わりか」

「っ・・・この減らず口がっ！」

ガスッ

ガン

ゴスッ

そのあと、俺は『だい』に何度も殴られた。殴る速度は最初に殴ってきたときと変わらない。だが、俺は全部の攻撃を受けた。わざと。

「・・・そろそろやめたらどうだ？」

「このっ」

「俺はお前のために言っているんだがな」

「なんだと!？」

「・・・自分の手を見てもろ」

俺は『だい』にそういつて『だい』の手を見る。俺の言葉に『だい』も、自分の手を見た。赤く腫れていて、何本かの骨がヒビないし骨折しているようだ。もちろん、俺は無傷。普通に海斗の攻撃の方が痛い。まあ、あれだ。よくある『その程度痛くも痒くもないわ!』とか『ん? なにかしたか?』ってな感じだ。それにしても、痛そうだな。見ているこっちもなんだか少し痛くなってきた気がする。まあ、戯言だけど。

「っ!？」

「速く保健室とかに行った方がいいんじゃないか？」

そう俺が言つと、『だい』は俺を睨みつけながらどっかに行つてしまった。だいじょうぶかな? 少しやつちまった感があるが、気にしないでおこう。・・・でも、なんか嫌な予感しかないな。

「・・・海斗。もしかして、俺やつちまったか？」

「もしかしくなくても、やつちまったな」

やばい、初日から呼び出し食らうかも。俺、これでも学校で呼び出し食らったの賞を取ったときぐらいなんだぜ?

だが、俺のそんな心配も杞憂に終わり、入学式も普通に始まって、普通に終わった。まるでハムの人みたいだ。「普通って言うなあ!」とか聞こえてきた気がしたが、気のせい。そう、気のせいだ。決して俺が怖いから勝手に気のせいにしてるというわけじゃない。

・・・ホントだからね?

信じてくれる? そうか、よかった。ところでその手に持っているそれはなんだい?
え?

『いろんな国の怖い話100連発！これで今夜は眠れない！』
だつて？

・ ・ ・ すいません。嘘つきました。ホントはものすごく怖いんです。
だから、本を開いて早速読もうとするなあ！いや、読まないでください！お願いします！いや、マジ勘弁！『一話目』トイレの中の鬼の手』とかいわないでええええええ！

Part 10：憐桜学園・・・（後書き）

今回もなんかおかしいことに・・・

相変わらず駄文です。

熱があるんでいつもよりひどい気が・・・。

P.S.

今日カラオケ行ってきました。

6時間耐久やったので、のどが死にました。

Part:11 戯言シリーズの能力をもらったわけ・・・(前書き)

11話目です

相変わらず変なテンションに風邪もあいまって

ヤバイことに・・・

Part:11 戯言シリーズの能力をもらったわけ・・・

入学して半年

入学してから半年がたった。

え？

展開が早い？

だって仕方ないじゃん。この半年いろいろありすぎて逆に忘れちゃったんだよ！

・・・はい、そうですね。いいわけですね。ええ、わかってます。そうですね。すべて私が悪うございましたあ！・・・だから、ね。その某ひぐらしに出てくるヤンでるヒロインが持つている得物をしまつてくれませんかねえ。私今までにないほど命の危機を感じてるんですが！まつて。冷静に。そうそうそう、そのままをこちらにわたあああああ・・・。

しばらくお待ちください

・・・コホン。

えー、大変お見苦しい姿をお見せしました。（あれはすべて脳内での出来事です）

話を戻します。

えー、あのあとクラスに入ったわけですが、案の定俺はみんなの視線をひとりじめした。そして、原作通りソントク君が突っかかってきたわけですが、海斗君がこれを撃退しました。あの、プレイヤーの腹筋を崩壊させた会話をナマで見ることができて秀樹感激！！

・・・古い？

秀樹なめんなっ！

「ローラー」

って歌うところ目の前におばさんがいたから

「ろーば」

って歌った勇者だぞ！

俺は無理だわ。そんなことできん。もちろんその後の展開的な意味で。

・・・コホン。

また脱線してしまいました。戻します。

えー、どこまで言ったっけ？・・・あ、そうそう。そんでその後、薫とか侑祈とかも会ったわけだけど・・・。薫、マジヤバイ！メツチャかわいー！思わず凝視しちゃったよ！何あの白さ！何あの肌のきめー！いやマジヤバイっしょ！（幹久風に）いやー、眼福眼福。ちよつと（かなり）変な目で見られたけど気にしない。

ちなみに俺の自己紹介は某SOS団団長みたいなことを言いました。

『この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら（ry』

こんな感じである。もちろん、みんなに白い目で見られました。とにかく初日はいろんな目で大変だったね。みんなに変な目で見られるは、教師には目つけられるわでもう目も当てられね。

その後もいろいろあったね。海斗がブラックサンタ出したり侑祈に勝負挑まれたり。

何より一番の出来事は海斗と薫がキスしたことだね！海斗羨まし過ぎんだろ！何で俺じゃないんだよっ！って本気で思ったね。

そんなこんなで夏休みもいろんなことがあったけど無事終わり（合宿は適当にごまかした）、テストや体力測定も適当にやって（テストは6割キープ、体力測定はオールB）、普通の評価を得た。まあ、入学式の“あれ”のせいで、教師たちには目をつけられてるが。

まあ、今はそんなことおいといて。

今日は、調理実習だ。

原作では調理実習とかなかったからびつくりした。つか、必要あんのか？と、思ったが、戯言シリーズをもらったときにやろうとした1つ目の目的を行使できる！いままでろくな器具がなかったからできなかつたが今回は違う！

そう！俺の一つ目の目的は

『【天才・料理人】を使ってオムライスをつくる』

ことだ！

俺は卵料理が大好きだ！卵焼き、目玉焼き、オムライス、オムレツ
e t c . . .

もちろんマヨラーである！

禁書目録のO P 『N o , b u t s』のさびの出だしが『マヨラー！』と聞こえるぐらいの！

・・・え？

みんなそう聞こえる？
ははは、ご冗談を。

そして、今日の課題は『オムライス』！やったね！ちなみにメンバ―は俺と海斗と薫だ。ほかのところは大体5人で構成されているが、ココだけ3人。理由は『あふれたから』らしい。だったらどっか4人にしたら良いだろ！ってはないだな。まあ、俺にとっては好都合だが。

ということだ

「海斗、薫」

『なんだ？』

「一切手を出すなよ？」

「は？」

「まかせろ」

「ちょ！？海斗！何を」

「まあ、みてる」

反抗しようとした薫を海斗が抑える。さすが海斗。わかる男はかつこいいねえ。海斗には、小さいころから俺の料理の味見役をしてもらっていた。最初はいやそうだったが、一口食べたら『おいしい！』といって、それから喜んで味見役をやるようになった。最後に俺の料理を食わせたのが9歳のころだから、久しぶりに食べる俺の手料理に期待してるのかな？ふふふ、期待に添えられるようにがんばると思いますか。

「えーっと？たしか、まず、中に入れる具を細かく切って」

たまねぎ、肉を細かく切る。ココで、【天才・料理人】と、なぜか【ガンダールヴ】の能力が発動。包丁の使い方を“理解”して、す

ばやく切る。

トットトットトットツ
スースースースースーッ

「す、すごい」

「だから言っただろ？」

「次にー？フライパンでこれを炒めて・・・ココでケチャップ投入！・・・んでココでご飯！」

フライパンに油をしき、たまねぎと肉を入れる。火が十分に通ったら、ケチャップを入れ、ご飯もそこに入れてよく混ぜる。これで『オムライス』の『ライス』の部分が完成。

「お次は？玉子を割って塩、こしょう、マヨネーズを入れてよく混ぜる。フライパンに玉子をいれて焼く」

玉子を割り、塩、こしょう、マヨネーズを加えてよく混ぜる。フライパンに油をしき、玉子を流しいれて焼く。マヨネーズはふんわり感を出すために入れる。（ココ重要

「半熟のときに、『ライス』を玉子に乗せ、そのまま玉子をフライパンのはじによせる。そのまま皿に、返しながら置き、形を整える」

半熟の状態のときに、『ライス』を玉子の中央に乗せ、玉子をすべらせるようにフライパンのはじによせる。それをそのまま皿の上に、返しながら置き、形を整える。ココで『半熟』について気をつける。早過ぎればべちゃべちゃになり、遅過ぎれば『ライス』とうまく絡まない。早過ぎず遅過ぎず、卵の固まるスピードを“理解”したうえで『ライス』をいれる。これで『オムライス』の完成だ。

「空いたフライパンに、ケチャップ、コンソメキューブ、にんにくと水大さじ3〜4を入れて火にかける」

ケチャップはあたりまえとして、コンソメキューブとにんにくはなんとなくだ。これで俺流ソース（洋風）の完成だ。

「あとは、これを『オムライス』にかけて・・・よし！できた！」

ふう……。われながら惚れ惚れするほどの手際のよさだぜ。まあ、これも【天才・料理人】のおかげなんだがな。それを知っているのは、この世に俺しかない。

「んじゃ、食うか。いただきます」

「いただきます」

「い、いただきます」

完成したオムライス（3人で分けた）を、それぞれ食べ始める。

「うん、うまいな」

「久しぶりに食べたが、やっぱりうまいな」

「お、おいしい・・・（羨ましいな・・・）」

俺、海斗、薫の順番に感想を述べていく。評価は上々。さすがだな。

ちなみに他の目的は『2・【罪口】の能力を使い、自分専用の武器を作る』と『3・【曲絃系】をつかって【君の知らない物語】を一人で弾く』ことだ。もちろん3はニコ動にアップするつもりだ。狐の仮面つけて。

そんなこんなで、調理実習が終わった。

S i d e : x x x x

はあ、昨日も『ベルム』さんこなかったな！。

ココ1年ぐらい『ベルム』さんを見ていない。私が学校に言っている間に来ているんじゃないか、と思いギルメンに聞いてみたがみんなの返事は『知らない』の一言だ。

「どうしてこなくなってしまったんでしょうか・・・」

私は最近そのことばかり考えている。だから、いつも以上にいろんなことで失敗してしまう。

お姉様もお父様『大丈夫だ』って言うってくれるけど、私が大丈夫じゃない。

「・・・どれもこれも『ベルム』さんがいけないんです」

そうです。そうですよね！全部『ベルム』さんがいけないんです。私がこんなに心配しているっていうのに、なんにも言わないで突然姿をくらまして・・・。

たぶんこんなことを考えていたから、あんなことになったんだろうと思う。でも、後悔はしていません。むしろ、『私、よくやった！』と褒めてあげたいくらいです。

「っ！危ない！」

そう、これが彼との初めての出会いでした。

Part:11 戯言シリーズの能力をもらったわけ・・・（後書き）

今回も短いです

感がいい人（よくない人も？）は気づいていると思いますが

ヒロインフラグが建ちそうです

ヒロインにするかしないかは感想に書いてください

話的には海斗がどの行動をとるのかで道が決まるので

ここで凌矢がフラグ建てても、ルートがひとつ消えるだけです

私敵にはヒロインにしたいです。

P a r t : 1 2 彩 現 る ! ! . . . (前 書 き)

12 話 目 で す

「 B a t t l e M o o n W a r s 銀 」

を 久 し ぶ り に や っ て た ら 更 新 遅 れ ま し た

す い ま せ ん

Part:12 彩現る!!...

Side: 凌矢

調理実習も無事終わり

なんとなく外の空気を吸いながら考え事をしていた。

「みんな強くなったかな...」

そう、俺はギルメンのことを考えていた。

1年前、入学すると決めて以来、一度もログインしていない。
入学する直前になって気づいたが

「いまさらログインしても遅いよね」

と思い、結局ギルメンには何も言わないまま1年を過ごしている。

夏休みは、海斗や薫といると飽きなかったので

特に外には行かなかった。(侑祈がしつこく誘ってきたが、暑いし
めんどいので行かなかった)

俺が何の連絡もなくログインしていないの心配していないだろうか？

「...まあ、あいつらに限ってそれはないな」

そう思いながら校門に向かいながらぶらぶら歩いていると視界の端
に鮮やかなピンク色がうつった。その容貌と髪の色は見慣れたもの
で

「あれは...彩か」

この『暁の護衛』の世界のヒロインのうちの一人である『二階堂
彩』がふらふらしながら校門に向かっていていた。まさか、こん

なところで主要キャラに遭うとはな……。つか、彩だ！彩だよ！生彩だよ！！『暁の護衛』に出てくるヒロインはみんなかわいいけど、そんなかで特に『胸』の大きさに関しては彩と萌の独壇場である！ああ、あの『胸』でもふもふされたい……。まあ、麗華の控えめな『胸』も好きだけどなっ！巨乳には巨乳の、ひんぬーにはひんぬーのいいところがある！

まあ、そんなくだらないことを考えながら、彩の行動を観察していた。まあ、こんなところだし、事故にあったり通り魔に刺されることはないだろう。そう思い俺は帰ろうとした。だが、次の瞬間そんな考えは吹っ飛んだ。

その彩が、何を思ったのか車道に出て、そこに圧倒的な質量を持った物質が走ってくる。彩はまだ気がついていないようだ。やばいっ！このままじゃ、彩が轢かれる！そう思う前にもう体が動き出していた。

「っ！危ない！」

「え？」

間一髪のところでは彩もろとも歩道に転がることができた。「あぶねえじゃねか！」と、車の運転手が言ってきたが「あんた、この轢いてたら死んでたよ」と返してやった。『何を馬鹿なことを』みたいな視線を運転手が向けてきたが、彩の制服を見た瞬間、顔が青を乗り越して白くなっていった。

「あんた。今ここで起こったことは忘れてやるから、早くココから去ったほうがいいぞ？」

「っ！？お、おう」

そう言つて運転手は逃げるよう（実際に逃げてるのだが）に車を運転して去っていった。

「・・・んう・・・」

・・・あ。そういえば彩抱えたまんまだった。忘れてたわ。つか、この腕に伝わるやわらかい感触は・・・いかんいかん。まだ感じていたい、とりあえず（・・・）安否確認しなければいけない。

「おい、大丈夫か」

「え、あ、はい」

「怪我とかしてないか？」

「あ、は、はい。大丈夫だと思います」

「そうか」

とりあえず怪我とかしてないらしい。それはなによりだ。彩頭はあれだが、結構好きなキャラだから怪我とかしていたら俺発狂してたかもしれない。とりあえず、スーツについた埃を払いながら立ち上がる。彩はまだ呆けている。

「ほら」

「え？」

俺は彩に向かって、手を差し出す。そうしたら、何を思ったのか、俺の手の上に自分の手をグーにして置いてきた。

「・・・おい」

「はい？」

「なんで『お手』なんかしてんだ？」

「へ？ああああ、ごめんなさいっ！」

・・・コホン。

えー、大変の見苦しい姿をお見せしました。話し戻します。
彩の手を引き、とりあえず立たせた。

「あ、あの！あ、ありがとうございました！」

「ん？あゝ、いいよ。偶然通りかかっただけだし」

とりあえずホントのことを述べながら、手を振る。

「あのゝ、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「んあ？ああ、俺の名前ね・・・。俺は」

そこで俺の中の海斗がささやいた！『ここはいつちょ遊んでやれ！』
と。もちろん俺はそれに

「スティーブン・セガールだ」

「え！？あの渋いところが人気で、関西弁ペラペラのハリウッド俳優と同じ名前！？・・・って、どこからどう見たって日本人じゃないですかっ！」

・・・なんで関西弁ペラペラってしてんねん。

「え？奥さんが関西人だからに決まってるからじゃないですか。これ、結構有名ですよ？」

あ、そうなん。・・・って

「俺の心読んだ?!」

「はい？」

「今俺の心の中読んだよね?！」

「え? いいえ?」

・・・え?じゃあ、何でわかつたんだ?

「顔に出てますから」

「そうなのか・・・orz」

どうやら、俺は思っていることが顔に出るタイプらしい。今まで気づかなかった。

「・・・あ!やべつ。海斗に稽古つける約束してたんだ」

「え?」

「俺用事あつから、また縁があつたら!」

そう言つて俺は領に向け走り出した。「あの〜!お名前は〜!」とか聞こえてきた気がしたが、今はかまつてられないので、無視する。

S i d e : 彩

「俺用事あつから、また縁があつたら!」

そう言つて彼は校内へと走っていきます。・・・あ!そういえば!

「あの〜!お名前は〜!」

と問いかけてみたが、彼は止まることなく校内へ消えていつてしまわれました。

最後までお名前を聞くことができませんでした。私の命の恩人なのに・・・。

でも、なんてベタな展開なんでしょう。

私が歩道に出る　車が来る　彼が私を助ける　名前も言わないで立ち去る

うん、これだけ見ても『この少女マンガですか！』ってツツコミたくなります。でも、本当に少女マンガのようなら、この後彼と偶然であうでしょう。

でも、私の初恋はまだ終わっていません。彼は、ものすごくよかったんですが、私にはもう好きな人がいます。・・・ココ一年会話をしていませんが。

「『ベルム』さん・・・」

『どうしてログインしてくれないんですか・・・？』

私は好きな人の名前をつぶやきながら、そんなことを考えていました。

Part:12彩現る!!・・・(後書き)

今回も

かなーりグダグダになった気が・・・

こんな拙い文ですいません

P a r t 1 3 : 原作開始・・・？（前書き）

13 話目です

やっと原作が始まろうとしております

お願いします

Part 13：原作開始・・・？

Side：彩

『彼』に助けてもらってから半年近くたち、私達はあと少しで2年生になります。

短いようで長かったこの1年間もようやく終わりを告げるようです。

・・・相変わらず『ベルム』さんは、ログインする気配さえありません。

もう、私達のことを忘れてしまったのでしょうか？・・・いえ、『ベルム』さんに限ってそんなことはありませんね。何よりも『仲間』を大切にする『ベルム』さんにとって、私達【赤蛇】はかけがえのない存在だと思います。一度、

『ベルムさんにとってギルドとはなんですか？』

と聞いたことがあります。そうしたら

『仲間であり、家族だ』

と、言っていました。『かつこつけてる』と、普通の人は思いかもしれませんが。でも、普段の行動とかを見ていると『やっぱりな』と思いがちな人もいます。だって、無償で課金アイテムくれたりする人を私は『ベルム』さん以外見たことがありません。レベルが一定に到達したりしたときも『ベルム』さんは課金アイテムをくれます。

・・・何か話しがずれた気がします。

まあ、いいです。そんなことより今は重要なことがあります。

「どうしましょうか・・・？」

私達は、一般的に『プリンシパル護衛対象者』と呼ばれ、2年生にあがるとき同
学年の生徒から『ボディーガード護衛者』を選びます。同学年といっても、いつし
よに勉強したりしてきた人ではありません。1年生のときは『プリンシパル護衛
対象者』と『ボディーガード護衛者』は別々に授業を受けます。細かいことはわか
りません。

そのため、『プリンシパル護衛対象者』には『ボディーガード護衛者』の能力値などを記した書
類が配られます。そして、その中から自分が『この人なら私の護衛
を任せることができる』という人を選び、提出します。基本私達の
意見を尊重し、自分が選んだ『ボディーガード護衛者』になります。

「誰でもいいんだけどなあ」

私はそんなことを思いながら、書類を一つずつ見ていきます。特に
要望がない場合は、学園側が危険度に応じて『ボディーガード護衛者』を選びます。

「あ・・・この人・・・」

そんな中、私はある書類のところで手を止めました。『彼』の顔写
真が書類の右上に写っていました。どうやら『彼』もココの生徒だ
ったようです。そんな『彼』の経歴を見ると

「住所不明、出生不明、家族構成不明、趣味読書、特技ピッキング、
声帯模写・・・」

なんでやねん。

あからさまに怪しい経歴でした。名前が下沼凌矢さんというらしいです。『意外と普通の名前だなぁ』とかは思っていない。嘘じやありません。本当です。・・・ええ、分かってくればいいんです。と、いうよりそもそも、何で特技がピッキングなんですか！？しかも、声帯模写って・・・あの時彼を見たときも思いましたが、彼は何か他の人とは『違う』気がします。『何が』と聞かれたら答えることができませんが、何か『彼』のオーラ・・・とでも言えばいいんでしょうか。それが、明らかに違う気がするんです。まあ、たぶん私の気のせいだと思いますが・・・。

そんなことを思いながら経歴を見ていました。全部見終わったとき、私は『誰』を『ボディーガード護衛者』にするかもう決まっていました。

「よし、下沼凌矢さんにしよう・・・」

そう、あの時助けてくれた『彼』の名前を呼びました。

S i d e : 海斗

人の記憶は曖昧で、人の記憶はおぼろげで、

人の記憶は時に幻想を作り出す

それは防衛本能であり、それは、実を虚に変えるものとなる。

物心がついて最初に教わったのは、人を疑い信じ、そして『愛すこと』だった。この腐りきった世界でも、人を疑い信じ愛することはできる、だが、自分も信じろ。そう教えてくれた人も、人を疑い信じ愛したと言った。人はいつか裏切る。だが、その裏切りすら愛

せと。『裏切り』という言葉に振るえが止まらなかった。だって、その人が好きだったから。だから震えた。なんて……恐ろしいんだろ。なんておぞましい世界なのだろう。と。でも、その人は、こつも言った。

『愛すること』

こんなにも溢れた同じ存在のなかで、自分は『愛すること』のできる人にめぐり合えるのだろうか。そう考えた。人を疑い、信じて、愛す。

『それが現実』

その人は一度頭を撫でて、漆黒の瞳でそう言った。

少なくとも、ココ一年間を平凡な毎日だと思ったことは一度もない。学校に行く日常というものは、俺にとってどれも新鮮だった。単純に、日常かどうか考える余裕がなかったとも言える。だからこの一年間はとても楽しかった。そして

平穏な街並みそのものに見える景色。そこに浮かぶ異質な存在たち。

「くっ……離せ、このバカ者がっ！」

「早く押し込め！邪魔が来るぞ！」

黒光りするバンに、少女を押し込もうとする複数の男。それも夜間ひっそりではなく真昼間から。男を観察すべく視線を送る。

……あの二人、顔濃いな。髭も濃い。

いや、今はそんなことでもいい。誰がどう見ても、紛れもない誘拐現場。だが、誰も助けに入らない。それが現実。他人のことなどどうでもいい。かわいいのは自分だけ。それは、人のあるべき姿。

「軽々しく、私に触れる、なっ……！」

「半殺し程度で済むと思っていたら、大間違い……！」

抵抗している少女は、学生服を着ている。それも、よく見慣れた。

「うるせえ！」

パシッ

「くあっ！」

少女の頬は、悲鳴とともに赤く染まった。

「これ以上痛い目見たくなかったら、さっさと乗れ！」

少女の姿はバンの中へと消えていく。

あらかじめ言うておく。オレは周囲の自己保身に走る人間と同類だ。だが、オレは駆け出して男たちの車に手を伸ばしていた。

なぜかって？

それはオレが、日常を逸脱した世界を求めていたからだ。

そう、逸脱した世界を……。

Part 13：原作開始・・・？（後書き）

まずはじめに

すいませんでした！！！！

もう、海斗のやつほとんどパクリです。

すいません。

そして変なところで終わってすいません！

ホンツツツトに申し訳ありませんでした！！

まあ、そんなこんなで原作に入ったわけですが

この後の展開どうしよう・・・

Part 14：彩エ・・・（前書き）

14話目です

今回も原作に沿ってやりたいと思っています

・・・一部イレギュラーありますが。

Part 14：彩エ・・・

Side：凌矢

誘拐事件の2週間前の朝

彩を助けた後は、特に大きな事件や行事もなく、あっという間に2年生進級まであと数週間となった。この1年間は長いようで短い、退屈しない1年間だったと思う。実際、海斗と愉快的仲間たちの会話聞いているだけで何回腹筋崩壊したことが。まあ、俺的には『海斗X神崎の爺さん』のくだりがおも気持ち悪かったが、一番好きだ。あとは、「はい」「はい、じゃない！はい、だ！」のくだりも好きだ。

「確か今日みんなの『護衛対象者』が決まるんだよね」

そう、俺たちは2年に進級するに連れて『護衛対象者』一人につき『護衛者』が原則一人つく。まあ、例外もあるらしいが・・・。

んで、今日それが決まるわけだ。たぶん海斗は原作同様誰もいないんだろうな、と思いつながら同時に、俺の『護衛対象者』は誰になるのかな、と考えていた。

まあ、能力とかその他もろもろ考えると、最悪、海斗同様誰もいないパターンもある。そんなことを考えていると、隣の部屋から話声が聞こえた。

「そろそろ起きた方がいい。遅刻してしまうぞ？」

「むにゃ、山手線は乗り過ぎすとさあ大変。同じところに戻ってく

るまで1時間もかかるんだぜ？」

・・・だったら、おとなしく次の電車が来るの待とうぜ？どうせ5分ぐらいで次来るんだからさ。そんなことを思っていると、薫も同じことを思ったらしく

「素直に乗り換えような」

「うーん……それは、盲点だったな……むにゃ」

「起きているんだろう？」

「……」

「やっぱり」

さすが薫。海斗ごときの戯れもお手の物。軽くあしらって、言ってやると、海斗は何も言い返せなくなった。いや、さすがっすね。

「先に行けよ。オレはもう少し寝てる」

「了解した。ただし、くれぐれも遅刻はするな」

「ああ……」

どうやら海斗はもう少し経ってから、行くらしい。だったら俺もそれに合わせて行こうと思い、少しの間、まったりしている。たぶん今、海斗はいろいろと説明してるだろうし……。そんなことを思っている、海斗が動く気配がした。それに合わせて、俺も部屋から出る。ちなみに、オレは一人部屋だ。べ、別に一人だから寂しかったとか思っていないんだからねっ！……すいません。調子こきました。

「おはよう、海斗」

「ん？ああ……」

挨拶も程々に、俺と海斗は並んで歩き出す。道中特に何もなく、校門前まで到着する。・・・そら、そうか。

「ついたか……」

「ああ」

いやゝ、それにしても、いつ見ても豪華な校門だな。いったいこの学園建てるのにどのくらいの金がかかったことだろうか。まあ、経済界や政治界の重鎮の娘が通ってる学校だからな。昔は、息子も通っていたらしいがな。源蔵と源蔵とか源蔵とか。警備も最新、プロのボディーガードもいっぱいいる。これだけの設備、維持するだけでウン千万かかってんじゃないか？そう、ここが俺たちの通っている『憐桜学園』だ。1年前俺たちが入学した超一流の学園だ。

「これが本校に続く中庭だ」

「……誰に言ってた？」

「……さあ？」

・・・まあ、深く考えないようにしよう。俺も偶に宇宙意思と会話するからな。

「遅かったな、海斗」

「ん？」

あ、薫だ。相変わらず美しいですね、はい。

「寝惚けて訓練施設に行つたんじゃないかと思ったぞ」

「そんな間抜けなことするかよ」

「海斗ならしかねないと思つたんだ」

「ありえない話ではないな……な、海斗」

「……そうかい」

海斗が『納得いかない』といった顔で答える。あ、そうそう。薫ってのは、この『暁の護衛』のヒロインの一人で、『罪深き終末論』で必ずHシーンがある。本名は南条 薫^{なんじょう かおる}。実は名門の令嬢。ぶつちやけお嬢様。もちろん声は『芹園 みや』さん。有名な役どころは……あ、『恋姫十無双』の張飛と華雄って言えばいいのかな？まあ、それなりに有名な人であるのは間違いない。

「今日で決まるんだな」

「ああ、雇われ先か？」

「雇われ先？まあ、言わんとすることはわかるが……」

「もっと言葉、選ぼうぜ？海斗」

「……ほつとけ」

俺が嫌味を言っていると海斗は『そんなもん、知らん』といった顔で返してくる。

「正確に言えば、私達は雇われるわけじゃないだろう？給与を貰うわけでも、保障が付くわけでもないのだから」

「そうだったな」

「そうだな」

そう、俺たちは、あくまで『護衛者』であり、それ以上でもそれ以下でもない。つまり、だ。俺たちがたとえ死んだとしても、それは俺たちの責任であり、決して『護衛対象者』の責任ではない、ということだ。

「私は少し心配だ。お前がちゃんと選ばれるかどうか」

「成績が悪いからだろう？」

「そうじゃない。どうもお前は緊張感に欠けるんだ。それで本当に、ボディーガードが勤まるのか？」

「さあ、な」

そうなのだ。海斗は『あまり目立ちたくない』と理由から、わざと成績を落としている。でもな、海斗。お前、『悪い』意味で目立ってるぞ？そう、『悪い』意味で。でも、それ以前にひどいことがある。そう、海斗は『緊張感』が欠けている。

「そうだな。薫やソンは大丈夫だと思うが、海斗はどうだかわからないな」

「……何を言っている？お前もだぞ？凌矢」

「うえ？！俺も？」

「ああ」

どうやら俺も『緊張感』が欠けているらしい。まあ、そんなに成績悪くないから大丈夫だろう。あれ？でも、俺ってこの連中たちにしてみたら、悪いほうなのか？最後にやったテストの順位を思い出してみる。35人中22位。・・・うん、そんな悪くない。悪くない。・・・悪くないよね？そんなことを考えていると、海斗も同じく何か考えていたのだろう、薫が話しかけていた。

「なにを考え込んでいるんだ？」

「改めてうちの学園の凄さを思い知っていた」

・・・俺も。

「凄さ？」

「いや……」

そのあとは海斗が何か問いかけていた。その問いに、薫は自信を持って答えていた。だが、自信にあふれているはずなのに、どこかはかなげな瞳を揺らせ、薫は学園のほうを見つめていた。ああ、薫のこの顔もきれいだな、とそんなことを考えていると

「そんな仕草見せるから、色々厄介な目にあわされるんだぜ？」

「なんだ、その仕草とは……」

会とも、俺と同じことを思っていたらしく、薫に言い聞かせていた。

「自覚ないのは考え物だよな。俺も何度襲いそうになったことが」

そこに、新たに第三者の声が割って入る。

「侑祈か」

そう、割って入った声の持ち主は、この1年間俺たちと一緒にばかりやって過ごしたうちの一人である侑祈だった。本名は錦織^{にしいおり} 侑祈^{ゆうき}。その正体は、倉屋敷重工が開発した高性能？ロボットだ。ロボットだが頭はすこぶる悪い。そのかわり、運動能力の面に関しては常人のスペックをはるかに上回る。つまり超人である。ロボットだが。まあ、本人は自分がロボットだってことを自覚していないらしいがな。

「うつす、おはようさん」

「おはよう」

「おう、おはよう、侑祈」

「今日も一段と女に見えるなあ、薫は」

「身体的特徴を侮辱しないでくれ。生まれながらのことに關しては、私にはどうすることも出来ない」

「そうは言われてもなあ……」

・・・いや、女だから。だが、それを話すわけにはいかない薫は

「もうすぐ薫とのルームメイトから解放されるから言うが、侑祈にモノより、持つてるモノはデカイからな」

「マジで!？」

こういう風に海斗に度々フォローしてもらっている。

その後も他愛のない会話をしながら、俺たちは学園へと向かった。

教室

教室に入ると、これまで一緒に1年間がんばってきたメンバーが揃っていた。みんな、浮き足立っているようだ。

「思い出すな、入学式のことを」

「突然背後から話しかけるな、心臓に悪い」

おもむろにソンが口を開いた。海斗とソンの会話は面白いから、俺は黙って聞き耳を立てる。そうそう、ソンってのはあだ名で、本名は宮川^{みやがわ}尊徳^{たかのり}。名門である宮川家の末弟で、プライドが高く人を見下したような態度を取る。だが、自分が認めた相手には、自分と対等に扱う。能力が高い兄姉にコンプレックスを抱いている。

「一年前にも同じようなことを言われたな」

「一年前と同じことをしてるからだろ」

「ふん」

「貴様程度の實力で、よく進級できたものだ」

「生まれつき幸運の持ち主なんだな」

「せいぜい、中流のお嬢さまでも警護することだ」

「俺は誰も警護しない」

「なに？」

「……なんでもない」

「まあ、僕は麗華お嬢さまで当確だろう」

残念！その役割は海斗だ！んで、お前は妹のほうだ。・・・強き生きろーソン！

「麗華？」

「まさか、知らないなどと抜かすなよ？」

「……………」

「おい」

「ああ、あの……」

「思い出してないな？」

「……………」

「いくら高嶺の花とは言え、それくらいは覚えておけ」

そういつてソンは説明を始めた。

「日本でも有数の資産家である二階堂」

「そしてその二階堂家の長女である、麗華お嬢さまだ」

「有数の資産家だから、そのボディーガードになりたいのか？」

「当然だろう。僕らボディーガードにとって、要人の資産価値はそのまま僕らの価値につながる」

「二階堂家で僕の名を売れば、やがてさらに有名な要人をガードする日も遠くないだろう」

「って、なにをしている……」

「今後の参考のため、すべてメモしてるだけだ。尊は気にせず喋ってくれていいぜ」

「……学園長宛と書かれてあるぞ……？」

「後輩ボディーガードたちの手本となり、僕は最強のボディーガードとして君臨し、庶民からかけ離れた生活をしてやるぜ、へっへっへ」

「そんなこと言っていないだろうっ！」

「腹黒くていいよな」

「よくないわ！」

やっぱりこいつらの茶番は最高だわww

その後も、他のやつらとなんでもない会話をして席に着いた。

席について教官を待っているとチャイムとほぼ同時に、やって来る。

「全員揃っているな？」

そういつてあたりを見渡す。

「お前たちが進級できたこと、心より嬉しく思う」

「今年は特に豊作と言っていていいだろう」

「僅か数%ではない。数%も違うのだ、誇っていい」

「ただし……それはこの教室を出るまでだ」

「お前たちは新しい門出とともに、今まで以上に厳しい現実と立ち向かっていかなければならない」

「今ここで、もう一度思い返してもらいたい。自分に与えられた使命はなにか、自分の存在意義はなにか？」

相変わらずバン、バンうるせえな。

「尊徳、どうだ、答えられるか？」

「われわれの使命は、プリンシパルを命がけで守ることです」

・・・なんかはじまった。うざいから無視しよう。

「さて……そろそろ本題に入ろう」

お？おわったぽい。

「今まで正式決定したには23名だ」

「この決定に対しての意義は一切認められない」

「宮川尊徳！」

「はい！」

「プリンシパル、二階堂……」

ここまでは原さく

「二階堂……彩の警護の補佐を命ずる」

「……え？」

「すみません、今なんと……？」

「二階堂彩の警護の補佐を命ずると言っただ」

・・・は？補佐？

「そして、下沼凌矢！」

「・・・はい」

「お前には、プリンシパル、二階堂彩の警護を命ずる」

・・・なんでさ。

待て、落ち着け。どうしてこうなった？俺は何も

「……あ」

やべ、一回助けたじゃん。いや、それはありえないだろ。

「ちなみに、これはプリンシパル本人の強い希望による決定だ」

・・・彩エ・・・。

こうして俺は、彩のボディガードとなった。

P・S・

他の人たちは原作道理になりました。

Part 14：彩エ・・・（後書き）

すいません

すいません

無理があるの覚悟でやりました。

突っ込まないで

自覚してますから。

お知らせ

テストが終わったら更新します。

ちよつと

いや、かなり英語がヤバイ。

ほんとまじで

どうしよう・・・

覚えれない

単語とか意味とか・・・

もうどうしたらいいか分からない。

数学でも無理・・・。

漢文は何とかいける・・・。

でも、古文は・・・。

あああああああ

どうしようか・・・。

物理とかもつてのほかだ。

元科学部だけど

そんなのかんけーねー。

・・・もしかしてここで俺の人生ゲームオーバーですか？

いや、あきらめたらそこで試合終了だ！

あきらめない！

あきらめないぞ！

やあぁってやるぜっ！

お知らせ（後書き）

精霊使いの剣舞新刊買いました。

後

この中に一人、妹がいる！4巻買いました

マジホラー小説w

麗華が誘拐され・・・ない・・・だと・・・？（前書き）

おっひゃー

麗華が誘拐され・・・ない・・・だと・・・？

「何で僕が貴様の補佐なんてしなくちゃならないんだ！」

「いや、俺に言われても・・・」

とりあえずなんでこうなったか思い出してみよう。

～回想～

「教官！『補佐』とはどういうことですか！？」

「ん？宮川か・・・。『補佐』というのはその名の通り本来の『ボディーガード』をいろいろと助ける役割だ。この場合は『ボディーガード』は下沼だな」

「何で僕はこいつの『補佐』をしなければならないのですか！」

オイ、ソン。人のこと指差すな。失礼だぞ。

「・・・プリンスパル二階堂彩は、今年2年になる生徒の中でもっとも危険な生徒だ。そして本人は下沼を指名した。この学園は極力プリンスパルの要望は取り入れることになっている。だが、指名された下沼の能力ははつきりいつて役不足だ。そのことを二階堂彩に伝えたところ『それでもかまいません』と返事をしてきた。だが、不安が拭えない私達は緊急会議を開き打開策を考えた。それがお前だ、宮川」

「……つまりどういうことですか？」

つまり、俺だけだったら危険だから、能力がすごい生徒をつけちゃえってことだな。

・・・失礼な。ここにいるボディーガード全員が一斉にかかってきても勝てるっツいの。

(はいはい、チート乙ww by 作者)

うつせ！お前は黙ってる！

「つまり、だ。今年の『ボディーガード訓練生』の主席であるお前を補佐につければ、不安はなくなる、と私達は考えたのだ。その結果が宮川、おまえが『ボディーガード』の『補佐』として役割に付くことだ」

「しかし……！」

「宮川、お前たちの使命はなんだ？」

「……われわれの使命は、プリンシパルを命がけで守ることです」
「そうだ。そしてお前はこれから二階堂彩のボディーガードの補佐としてその使命を果たすことになる」

「ですが……！」

「……宮川、お前に拒否権はない。納得がいかなくとも、その身を盾として守り、使命を果たせ。私から言えることは以上だ」
「……わかり、ました」

～回想終わり～

なんかいま思うとソンに同情してきた。
だって自分が嫌いなやつ『補佐』をしなきゃならないんだぜ？
俺だったら死んでもやだね。

「そもそもなぜ貴様が指名される!？」

「いや・・・知り合い?だから」

「なぜ疑問系!？」

いや、だってね？一回助けただけだし、こっちから名乗ってないし、あっちの名前も聞いてないし。

「はぁ……もういい」

なんかため息つきながらどっかいつちやったよ。

「凌矢」

「ん？どうした薰？」

「彩様と知り合いなのか？」

「知り合いつていうか、顔見知りつていうか」

「……ずいぶんと曖昧なんだな」

「まあ、名前も言わないでその場去ったからな」

「……はぁ」

あ、いま『おまえつてやつは……』とか思っただろ！絶対！

むー！

しょうがないじゃんか。海斗に稽古つけなきゃいけなかったし。……つか、むーつてなんだ、俺よ。キモいぞ。

「ま、とりあえず帰るか」

もちろん帰ったらいつものメンバーで遊んだ。

数日後

おっす。

今日は、海斗が麗華を助ける日だ。

でも、原作と違って海斗は、かなり今の生活に充実している。
退屈病（命名：俺）はなんか知らんけど出てきてない。

・・・これってヤバイよね？

もしかしたら、海斗は麗華を助けに行かないかも。

いや、その場に居合わせたら、間違いなく助けにいくと思うが。
あいつ、なんか正義感とかメツチャ強くなってるし。

じゃあ、後はどうやってあの場面を見せるか、だな。
たぶん海斗は真面目に学校行くだろうし。佐竹との“あれ”はなかつたからね。

あの銃のやつ。

うゝん。

どうしよっかな。

どうするか。

俺がやるしかないのか？

・・・やるしかないか。

~~~~~

~~~~~

ということ、もう少して8時半です。

ちゃんと海斗には『話したいことがある』って言っておいた。

・・・はあ、これで俺も遅刻か！。

まあ、終業式とかダルいから出る気なかったけど。

「どうしたんだ？もう遅刻確定だぞ」

「いやー、ごめんごめん。ちょっと話したいことあってさ。・・・

・・・で？海斗。この一年どうだった？」

「・・・楽しかったぞ？」

「そつかー、俺も楽しかったな」

「・・・それがどうかしたのか？」

「いやー、なに。海斗が誰の護衛にもならなかったらどうしようか
と思っテナ」

「・・・なるようにしかないんじゃないか？」

「まあ、そうだな」

と、そのとき

キキイイイーーーー

（お？きたか・・・）

「くっ・・・離せこのバカ者が！」

「早く押し込め！邪魔が来るぞ！」

おいおい、こんな真昼間から良くやるな！。
ゲームやってても思ったけど、こいつら絶対頭おかしいよな。

「なあ・・・海斗」

「・・・なんだ？」

「あれって・・・誘拐、だよな？」

「・・・たぶん、そう、だろうな」

「うわぁー」

とりあえず、海斗にあいつらを捕捉させる。

「軽々しく私に触れるな・・・っ！」

「半殺し程度で済むと思っていたら、大間違い・・・！」

「うるせえ！」

パシーンッ

「くあっ！」

「これ以上痛い目見なくなかったらさっさとぼらぁ!？」

ドーンッ！

・・・え？

あっれ？

おかしいな？

何で俺の目の前で、あの黒い男、海斗からドロップキック食らってんの？

おいおいおい！

原作無視もいいところですねえ！まったく！

「おらあ！」

「あべしっ！」

と、いいながらも参戦する俺。
つくづくやになっちゃう。

「こ、この野郎！」

そう言つて、俺が殴ったほうの男が拳銃を出してくる。

「死ねっ！」

「お前が、な！」

とりあえづ拳銃を持っている腕を右足で蹴り上げる。
そこから顔に左足の回し蹴りを食らわせる。

「ひでぶっ！」

おお！

メツチャ吹っ飛んだ！

・・・つか、さ。

あいつ、北斗のファンか何かか？

やられ方がまったく同じなんだが？

・・・この際そんなことはどうでもいいか。

「・・・ふっ！」

「あぎゃ！」

お？あつちも終わったみたいだな。

「おーい、海斗。そつちも終わったみたいだな」
「ああ」

よしよし。

「じゃ、いくか」
「そうだな」
「・・・はっ！ちよ、ちよつと待ちなさいっ！」

お？麗華が食いついてきたぞ。
よし、ここは

「海斗。よろしく」
「何で俺なんだよ」
「いや、だって・・・あれ？」

・・・いさ、おかしい。オイ麗華。ここは海斗に視線を向けるべき
だろ？何で二人に向けてんねん。

「あんた達、助けるだけ助けといて、勝手にどこ行くつもりよ！」
「え？」
「どこってそりゃ・・・」
『学校？』

「こんな時間に学校って遅刻じゃない！しかも、何で疑問系！？」

おうおう。この声いい声だぜ。さすが大波さんだ。

「とりあえずサツに電話だな」

「よし、任せろ」

「ちよつと私の話を聞きなさい！」

・・・何かカオスになってきた。
つと。電話電話。

「あ？もしもしマツポですか？」

「マツポ！？」

「え？警察です？同じじゃん」

「いや、警察に向かってマツポはちよつと」

「え？“よう”がないなら切る？いやいやいや！“よう”はいる時に切るモンでしょ」

「・・・ああ、用と妖をかけたのか」

「ああ、なるほど・・・つて、分かりにくっ！」

「え？あ、いや、事件があつたから電話したんすけど」

「何かいきなりチャラ男みたいになった！」

「え？場所？ここはー・・・オイ、海斗。ここどこだ？」

「俺も知らん」

「いや、それぐらい知つておけよ！」

「近くに何か建物がないか？・・・『L i t t e f i n e』って
のがあるな」

「いや、ここにそんなのは・・・100m先にあつた！？」

「おkおk、じゃ、よろぴくー」

「古っ！！」

「よしこれでおkだ」

「よし、じゃあいくか」

「ハアハア・・・ちよつと、待ちなさいって、言ってるでしょう、
が！」

「何でそんなに疲れてんだ？」

「あんたのせいでしょうがっ！」

いやー、相変わらず麗華の突っ込みは冴えてるねー。
もう、72点あげちゃう！

・・・え？

微妙過ぎる！、って？

まあ、そう簡単に満点はあげられないからね。
何様だよとか思ったやつ。

介入者様だよ！

「とりあえずアンタ達。このタクシーに乗りなさい」

「いやいや、タクシーなんてどこに・・・あつた!？」

「い、いつの間に」

あの滅多に驚かない海斗までも、眼を見開いて驚いている。

「いいから乗りなさい！」

そして俺らは拉致ちがいますされた。

麗華が誘拐され・・・ない・・・だと・・・？（後書き）

久しぶり過ぎてグダグダww

まあ、気にしないで。

読みたくない人は読まなくていいから。

あと、文句あるなら読まないでね。

アンケートをとっておくぜい！

あゝ

ここでお知らせがあります。

次回からこの作品は『過去篇』にはいります。

そこで！

アンケートをとりたいと思います。

まず1つ目。

柊先生の娘さん・・・そう！絆ちゃん！ですが。

何歳という設定にしましょうか？あ、できれば4～6歳の間で。

一応主人公は海斗の3歳年上。つまり18歳。もう少しで19歳です。

柊先生の過去には必要不可欠の情報のため、ご協力お願いします。

次に2つ目。

ツキに関して。

1、原作通り海斗と雅樹に襲わせるか。

2、それとも、主人公が見つけて保護するか。

2の場合はツキのお母さん生存フラグがたちます。

やっぱり幸せになってもらわないとね！

と思う方は2に入れてください。

ご協力お願いします！！

アンケート結果だけ一応報告！

えー

このたびは

この作品に関してのアンケートにご協力いただき
誠にありがとうございます。

こんなもん書く暇あったらさっさと続き掛合と思う肩もいるかもし
れませんが！

が！

が！

が！

ですが！

これでやっと話の大筋が決まったのです。

まあ、まだ海斗を罪深き終末論ルートにするか普通に麗華ルートに
するか決めてないけど。

その時はまたアンケートとりますね。

さあ、そんなこんなでアンケートの結果ですが！

ツキちゃんは満場一致で2番になりました。

ここで、前の話を修正しないといけないという問題が発生。

まあ、そこはおいおいやっていくぜ。

次に絆の年齢についてだが・・・

6歳になったぜ！！

ということは、だ。

絆は主人公が1

おっところからはねたばれになるな。

つか、もうほとんどの人がわかつてると思う。

なのにやる必要があるのか、はなはだ疑問に思う今日この頃。
だが俺はくじけない！

と、言うことで

ここから気が向いたら更新します。

期待しないで待っててくださいやがりませです。

ツキとの出会い・何話続くかわからないからとりあえずその1・（前書き）

久しぶり・・・。

ツキとの出会い - 何話続くかわからないからとりあえずその1 -

Side：凌矢

おう、皆、久しぶり。

俺だ、俺。

いや、詐欺じゃねーからな。

まあ、今はくだらないことはおいといて。

今日から俺の過去について紹介していききたいと思う。
じゃあ、まずはツキとの出会いの前から。

では、どうぞ。

俺が来た時のここは、それはもうひどい有様だった。

一歩外に出れば死体が転がっており、常に『ねっとり』した視線が
まわりついでくる。

女性は大抵裸で転がっている。もちろん息はしていなかった。

そこで俺は決心した。

「俺がここをかえて見せる！」

そこから、俺の奮闘記が始まった。

~~~~~

まずはじめの1年はこの地区を占めた。

原作では海斗が占めたってことになっているが、そんなのかんけーねえー。

とりあえず戦闘狂と極悪人と殺人衝動があるやつは片っ端から潰した。

残っているのは、ここに来たばかりの人やか弱い女性ばかり。

まあ、例外も結構いるけど。

相馬とか相馬とか相馬とか・・・。

あ、相馬の奥さんは助けたよ？

どうやって？

そんなのどうでも良いじゃんか。結果よければすべてよし！

2年目でこの地区に新しい改革をもたらした。

それは『下沼グループ』設立である。建物は一週間で“俺”一人で建てた。

社員は禁止区域にいる人全員。

なんか知らんが「入れ」っていったら、皆二つ返事で了承してくれた。

まあ、ほとんどがリストラされたリーマンとか上司（つか、偉い人）の横暴に耐えられなくて逃げてきた人だ。

当然、仕事はできる。元研究者もいたから、研究もできる。

報酬は一日三回の食事と安心して眠れる寝床、少しの給料だ。

はじめはビクビクしていた社員の人たちも、このこう待遇にだんだん瞳に光を取り戻していった。

さっきも言ったが、もともと、仕事はできるので『下沼グループ』は瞬く間に成長。

今では日本5大企業のひとつとなっている。

特に無茶な注文はしていないし、自分にあつたペースで進めさせているから、社員からの文句も少ない。あるとしたら、『もっと仕事くれ！』ってことぐらいだ。

ちなみに表の世界にも会社がある。

まあ、見かけだけの会社だがな。本社が裏にあるということを隠すためだけに造った。

あ、そうそう。なんか貯金がまた増えた。

なんかどんどん増えていつて怖いぜ。まあ、神からもらったあの通帳とは別のところに保存しているがな。保存している銀行も『下沼グループ』だ。

3年目は禁止区域の清潔化。

これはかなり大変だった。

まず、死体を一箇所に集めて焼いた。

手遅れかもしれないが、伝染病など、即死性のある病気にかからないためだ。

やっぱり、人を焼いた時には独特のにおいがあり、気分が悪くなった。

一緒にやってる人の中で吐いている人もいたが、意地でも見届ける、と顔に書いていたからそつとしておいた。

次に建物。

これはほとんどが使い物にならなかった。

一番良いところでも、柱や壁にヒビが沢山入っていた。

めんどくさいので、全部ぶっ壊した。

あ、もちろん雅樹の家は別だぜ？

あそこは俺が建て直したから、そこらの建物とは一味・・・いや、四味くらい違うぜ？（意味がわかりません）

これで今ここに残ってる建物が、  
『下沼グループ本社・社員寮』・『雅樹と百合の家』  
だけになった。後々、海斗の家も建てるつもりだ。

・・・さすがにやり過ぎたと思ったが、まあ、大丈夫だろう。  
瓦礫の山は・・・とりあえずそのままにしておく。  
片付けんのめんどいし。

4年目〜今現在（俺12歳）

今は主にここに流れ着いた人たちを勧誘（という名の脅し）をする  
ために散歩をしている。

今では、本社に勤めている人数が2000を超えた。

・・・ドンだけ横暴やってんだ、表の野郎ども。

明らかに小学生以下の女の子がいた時はどうしようかと思ったぜ。  
でも、偶に殺人犯とか混じっていてO・H・A・N・A・S・Iを  
している。

もちろん受けたやつは漏れなく超真面目さんに大変身した。

今では、『下沼グループ』の大切な戦力だ。

え？

地下鉄のやつらどうした？

ああ、あいつらも俺の会社の一員だ。

元政治家のあの人（名前が出てこない）に俺がやっていることを話  
したら快く協力してくれた。

そんな時、舞とか舞とか舞に襲われて（物理的に）、朱美とか朱美と  
か朱美に襲われた（性的に）。

で、朱美さんは妊娠したらしい。まあ、この話はまた後で。

そんな時、1組の親子（といっても親は母親だけ）を見つけた。

そしてその後ろからは下卑た笑みを浮かべた男たちが。

そんなことを考えているうちに、俺の体は勝手に動きだしていた。



ツキとの出会い・何話続くかわからないからとりあえずその1・（後書き）

はい、アンケート！

またアンケートですが答えてくれたらうれしいです！

すでに3作品連載している私ですが、ネタに詰まりました。

と、いうことで新しく連載しようかなと思っています。

- 1、RATMAN
- 2、これゾン
- 3、ハイスクールDXD
- 4、れでいXばと！
- 5、ファイアーエムブレム 烈火の剣
- 6、IS
- 7、オリジナル作品
- 8、その他の作品

お願いだから叩かないでね！  
文句も受け付けないぜ！

ツキとの出会い・何話続かわからないからとりあえずその2・（前書き）

久しぶり過ぎてwww



・・・メツチャ個性豊かだなこの三人衆。  
なんか漫才してるみたいだ。

「俺が誰か？・・・俺は下沼グループ総執理事の下沼凌矢だ」

[illegible]

「アニキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

「な、し、下沼グループだと！」

・ ・ ・ まともに会話してるのが一人しかいない。

つか、アニキと呼ばれているお前。

俺のドロップキック喰らってもまだ余裕そうだな。

瓦礫に埋もれながら叫んでるし。

「お前ちよつと黙れ」ガスッ

[illegible]

「ア、アニキエ……」

「し、下沼グループ」

8年前、突如として発足した企業で、当初からその斬新なポリシーが売りの大企業。あらゆる部門で優秀な成績を残しており、客の受けも良好。さらに、宇宙開発に関しては右に出る企業はなく、世界でも3本の指に入るほど、影響力が高い。極めつけは、総轄理事の詳細不明。最初は一人ですべてのことをこなしており、かなりの天才ということしかわかっていない。それと、本社が何所にあるのか今もわかっていないなぞが多い企業。それが下沼企業」

・・・お前しょぼんとスナよ。男がそんなことしても、キモいだけだからな。

それと、そのモブ。長々と説明ありがとう。

Handwritten signature: *Handwritten signature*

[illegible]

キラシ

飛んでいく個性豊かなキモい3人衆。

ポカーン

そしてそれを啞然と見送る親子。

・ ・ ・ うん、メツチャシュールな光景だ。

まあ、こんなシュールな光景を生み出したのは俺だけだな。

あ、そうそう。

さっきの三人衆は下沼グループの特殊戦闘部隊「AAG」が回収した。

ちなみに部隊長は相馬さんだ。

なんか『木原神拳 常の型』なるものの達人らしい。

一度「しんのすけ!」といわせたときは、吹き出してしまった。

本人は「??」と、わけがわからなそうだった。

閑話休題

「大丈夫か？」

「……はっ！……い、今のはなんだっ たんでしょ うか？」

「お、お母さん……うう、ひっく……」

泣いた！

や、やばい！泣いた子供ほど大変なものはないぞ！

「・・・でも、可愛いな・・・ハッ！」

「お、俺はロリコンじゃないぞ！ただ泣き顔で上目遣いか可愛かっただけで・・・ハッ！」

「・・・もう考えるのやめよう。」

「ほらほらツキちゃん、泣かないの」

「うう・・・怖かったよお・・・」

「あらあら、どうしましょう」

「といいながら、子供をあやすお母さん。」

「とりあえず俺の会社に来るか？」

「あら？・・・迷子？」

「なんでやねんっ！」

「違うの？ぼく」

「あんたさっきの見てなかったのか！？つか、なんでぼく？！」

「あらあら、突っ込みがお上手なぼくだこと。下の方はどうなんでしょうね？」

「だからぼくじゃない！つか、優しそうな顔して何下ネタかましてんだよ！？」

「あらあら“あっち”のことが通じるのね？さては・・・もう卒業した？」

「やつぱりかあ！・・・黙秘権を行使します」

「あらあらあら、モテモテね」

「ちっがー！うー！！」

「はあはあはあ・・・。」

「やべえ・・・。この人メツチャ疲れる。」

「・・・そっいえば名前は？」

「あら？そついえば言つてなかつたわね」

「忘れてたんかい」

「私の名前は空野<sup>ほしの</sup> 星<sup>せい</sup>よ。気軽にセイちゃんと呼んでねこの子は

」

「すう・・・すう・・・」

「あらあら？寝ちゃったわね・・・この子の名前は月<sup>つき</sup>よ。子のこのことも気軽に月ちゃんと呼んでね」

「ああ、わかつたセイちゃん」

「なかなかノリがいい子ね。惚れちゃいそう」

「惚れたら大変だぜ？・・・っと、俺の名前言つてなかつたな。俺の名前は下沼凌矢。さっきも言つたが下沼グループ総轄理事をやっている」

「凌矢君ね、覚えてたわ」

「んじゃ、とりあえず、俺の会社に行きましようか」

・・・疲れた。

ツキとの出会い・何話続かわからないからとりあえずその2・（後書き）

なんかツキの母さんがww



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5775t/>

---

マジチートって言うジゲン越えてる

2011年12月31日21時51分発行